

西谷墳墓群

NISHIDANI FUNBOGUN

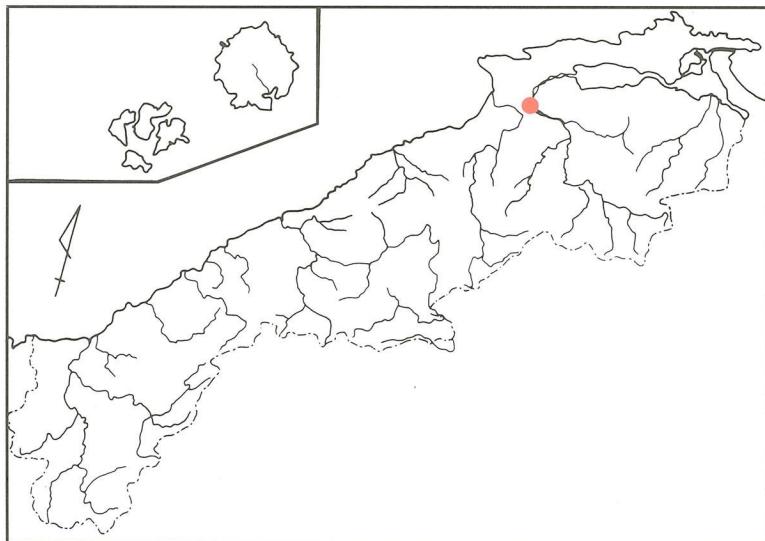
—平成10年度発掘調査報告書—



2000年3月
出雲市教育委員会

西谷墳墓群

—平成10年度発掘調査報告書—



西谷墳墓群位置図

2000年3月

出雲市教育委員会

はじめに

出雲市大津町に所在する西谷墳墓群は、代表的な四隅突出型墳丘墓6基を含む、弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓群で、神庭荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡との関連も注目される歴史的な価値の高い重要な遺跡です。

出雲市教育委員会では、この重要な歴史的遺産の保護・活用を図るため、平成9年度より周辺整備とともに遺跡の性格や遺存状態を把握するための確認調査を実施してきました。こうした活動の一環として、平成10年度に国庫および県費の補助を得て、未発掘の西谷墳墓群の主要墳墓を中心に発掘調査を実施いたしました。

その結果、6基の四隅突出型墳丘墓のうち4基までが出雲最大級のものであることが判明したほか、初めて古墳時代前期の墳墓の存在が確認されるなど、多くの貴重な成果を得ることができました。

今回提示させていただきました資料が、西谷墳墓群の歴史的意義の把握に、また出雲地方の歴史解明に役立てられれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の調査にご協力賜りました土地所有者の方々、ご指導いただきました関係各位に厚くお礼申し上げて報告書刊行のごあいさつとさせていただきます。

平成12年3月

出雲市教育委員会

教育長 多久 博

例　　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が平成10年度に国庫及び県費の補助を得て実施した西谷墳墓群発掘調査の報告書である。現地調査は平成10年度に、報告書作成は平成11年度に行なった。

2. 調査は、2・4・5・6・7・17号墓の墳丘墓6基と、番外3・5号墓の石棺墓2基の計8基について、トレンチ調査及び崩落面断面調査を実施した。

3. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

平成10年（1998）9月1日～平成11年（1999）3月31日

4. 調査を行なった地番は、次の通りである。

島根県出雲市大津町2669ほか

5. 調査は、次の組織で行なった。

調査指導者 渡邊 貞幸（島根大学法文学部教授）

池田 満雄（出雲市文化財審議会委員）

岸本 直文（文化庁記念物課文化財調査官）

柳浦 俊一（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）

事務局 後藤 政司（出雲市教育委員会 文化振興課長）

調査員 藤永 照隆（文化振興課 主事）

調査補助員 石橋 弥生　糸賀 伸文

現場作業員 吾郷 要子　富田 勉　前島 正喜　檍野 裕明　渡部 政義

遺物整理 今岡ひとみ　遠藤 恭子

6. 調査にあたっては、土地所有者をはじめ、地元の方々から多大な協力を賜った。記して謝意を表します。

7. 描図の方位は調査時に計測した磁北を示すもので、座標は座標系第Ⅲ系に基づいたものである。

8. 本書で施用した図面の内、2・4・17号墓の測量図は、島根大学考古学研究室所蔵の測量図面を一部改変して使用したものである。

9. 本報告書掲載の遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

本文目次

はじめに

例言

本文目次

挿図目次

第1章 位置と環境	1
(1) 位置	1
(2) 歴史的環境	1
第2章 調査・研究略史	5
第3章 調査の概要	7
(1) 2号墓の調査	7
1. 墳丘の現状	7
2. トレンチの配置	7
3. 墳丘の形態と規模	7
4. 出土遺物	13
(2) 4号墓の調査	18
1. 墳丘の現状	18
2. トレンチの配置	18
3. 墳丘の形態と規模	18
4. 出土遺物	22
(3) 5号墓の調査	23
1. 墳丘の現状	23
2. トレンチの配置	23
3. 墳丘の形態と規模	23
4. 番外3号墓	26
(4) 6号墓の調査	28
1. 墳丘の現状	28
2. トレンチの配置	28
3. 墳丘の形態と規模	30

(5) 7号墓の調査	31
1. 墳丘の現状	31
2. トレンチの配置	31
3. 墳丘の形態と規模	31
4. 主体部	33
5. 出土遺物	33
6. 番外 5号墓	36
(6) 17号墓の調査	37
1. 墳丘の現状	37
2. 崩落面土層堆積状況	37
3. 出土遺物	38
第4章 9号墓採集遺物	39
第5章 まとめ	40

挿 図 目 次

第1図	出雲平野の主要遺跡分布図	2～3
第2図	西谷墳墓群分布図	6
第3図	西谷2号墓墳丘測量図(島根大学考古学研究室原図)	8
第4図	西谷2号墓トレンチ実測図－1	9
第5図	西谷2号墓トレンチ実測図－2	10
第6図	西谷2号墓トレンチ実測図－3	11
第7図	西谷2号墓Cトレンチ出土遺物実測図－1	14
第8図	西谷2号墓Cトレンチ出土遺物実測図－2	15
第9図	西谷2号墓Cトレンチ出土遺物実測図－3	16
第10図	西谷2号墓W－3トレンチ出土遺物実測図	17
第11図	西谷2号墓採集遺物実測図	17
第12図	西谷4号墓墳丘測量図(島根大学考古学研究室原図)	19
第13図	西谷4号墓トレンチ実測図－1	20
第14図	西谷4号墓トレンチ実測図－2	21
第15図	西谷4号墓出土遺物実測図	22
第16図	西谷5号墓墳丘測量図	24

第17図	西谷5号墓トレンチ実測図－1	25
第18図	西谷5号墓トレンチ実測図－2	26
第19図	西谷番外3号墓実測図	27
第20図	西谷6号墓墳丘測量図	28
第21図	西谷6号墓トレンチ実測図	29
第22図	西谷6号墓採集遺物実測図	30
第23図	西谷7号墓墳丘測量図	32
第24図	西谷7号墓トレンチ配置図	33
第25図	西谷7号墓トレンチ実測図－1(墳丘)	34
第26図	西谷7号墓トレンチ実測図－2(墳頂主体部)	35
第27図	西谷7号墓主体部上出土遺物実測図	35
第28図	西谷番外5号墓実測図	36
第29図	西谷17号墓墳丘測量図(島根大学考古学研究室原図・加筆)	37
第30図	西谷17号墓土壙内出土遺物実測図	38
第31図	西谷17号墓崩落面土層堆積状況実測図	38
第32図	西谷9号墓採集遺物実測図	39
第33図	西谷9号墓墳丘測量図(文献3より転載)	39
第34図	西谷1号墓墳丘復元図(文献4・8より作図)	42
第35図	西谷2号墓墳丘復元図	42
第36図	西谷3号墓墳丘復元図(文献3・7より作図)	43
第37図	西谷4号墓墳丘復元図	44
第38図	西谷6号墓墳丘復元図	44
第39図	西谷9号墓墳丘復元図(文献3より作図)	45
	西谷墳墓群一覧	41

第1章 位置と環境

(1) 位置

西谷墳墓群は、出雲市大津町の西谷と呼ばれる小さな谷を形づくる丘陵上及びそこから派生する丘陵上に位置し、これまでの調査によって、四隅突出型墳丘墓6基以上を含む、弥生時代後期後半から古墳時代にかけての、墳丘を有するもの27基以上と墳丘を有さないもの5基以上の合計32基以上の墳墓からなる大規模な墳墓群である。

現在の出雲平野をとりまく地形は、北に北山山麓、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海には、それぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野は、この二大河川によって形成された沖積平野となっている。

しかしながら、遺跡が造営された頃の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。現在東流して宍道湖に注いでいる斐伊川は、当時は西流して、入海のような状況を呈していた潟湖（現在の神西湖・奈良時代の「神門水海」）に注いでいた。また、宍道湖の西端も現在よりかなり西にあったものと考えられている。このような地形のもと、西谷墳墓群は斐伊川が出雲平野に流れ入る地点の左岸にある、南から北へ伸びる丘陵上に営まれた遺跡である。

(2) 歴史的環境

縄文時代 出雲平野には、数多くの遺跡が存在している。出雲平野における遺跡の初源は、平野の北にある縄文時代早期初頭の菱根遺跡（大社町）、西の砂丘下にある縄文時代早期末の上長浜貝塚に遡るが、これに続く遺跡は確認されていない。

縄文時代後期・晩期になると、平野の北には出雲大社境内遺跡（大社町）や原山遺跡（大社町）で、南の丘陵下では三田谷I遺跡で土器が出土しており、平野縁辺部が生活の場となっていたことが確認される。平野の中央部の矢野遺跡からも少量の遺物が発見されているが、縄文時代における生活の場の中心は平野の縁辺部にあったものであろう。

弥生時代 弥生時代には、矢野遺跡などで前期の遺物が確認されているが量は少ない。しかし、中期から後期にかけて、入海周辺の沖積地を中心に集落が飛躍的に拡大し、四絡遺跡群（矢野遺跡・小山遺跡・姫原西遺跡など）をはじめ、天神遺跡、古志本郷遺跡、下古志遺跡（旧称正蓮寺周辺遺跡）などの大規模集落が出現する。これらの遺跡の多くは、集落に大規模な溝を多重に配置するものが多く、当地域の特徴ともなっている。

また、出雲平野に向かって南から派生する丘陵地には大量青銅器埋納で知られる神庭荒神谷遺跡（斐川町）や加茂岩倉遺跡（加茂町）が存在する。これは祭祀に関わる集落間の結合を物語るとともに出雲地方における青銅器文化の特殊性をしめすものである。これらの青銅器は弥生時代中期に使用され、後期に入るころまでに埋納されたものと考えられている。

弥生時代後期以降、四隅突出型墳丘墓6基を含む西谷墳墓群が南の丘陵上に築造される。この中に



第1図 出雲平野の主要遺跡分布図

- | | | | | | | | | | |
|----------|-----------|-------------|------------|------------|------------|--------------|-------------|-----------------|------------|
| 1. 西谷墳墓群 | 5. 白枝荒神遺跡 | 9. 神門寺境内廐寺 | 13. 地藏山古墳 | 17. 小坂古墳 | 21. 妙蓮寺山古墳 | 25. 原山遺跡 | 29. 軍原古墳 | 33. 後谷遺跡(出雲正倉跡) | 37. 神原神社古墳 |
| 2. 姫原西遺跡 | 6. 大寺古墳 | 10. 上塙治築山古墳 | 14. 三田谷I遺跡 | 18. 古志本郷遺跡 | 22. 放れ山古墳 | 26. 真名井銅戈出土地 | 30. 神庭岩船山古墳 | 34. 天寺平廐寺 | 38. 神門横穴墓群 |
| 3. 小山遺跡 | 7. 大念寺古墳 | 11. 築山遺跡 | 15. 光明寺3号墓 | 19. 下古志遺跡 | 23. 山地古墳 | 27. 出雲大社境内遺跡 | 31. 神庭荒神谷遺跡 | 35. 西安原遺跡 | |
| 4. 矢野遺跡 | 8. 天神遺跡 | 12. 上塙治横穴墓群 | 16. 朝山古墓 | 20. 宝塚古墳 | 24. 上長浜貝塚 | 28. 上島古墳 | 32. 貴船古墳 | 36. 加茂岩倉遺跡 | |

は、3号墓や9号墓など突出部を入れると長辺50m、もしくはそれ以上の規模を誇る大形のものもある。この時期には強力な共同体的結合が図られており、その首長の権力が強大になっていたことが窺える。

古墳時代 古墳時代になると、弥生時代に見られた平野部集落の多くが衰退もしくは消滅して行く傾向にあり、前・中期の古墳あまり知られていない。現在のところ、前期古墳として筒形銅器などを出土した山地古墳、景初三年銘鏡を出土した神原神社古墳（加茂町）などが挙げられる。これらに続くものとしては、軍原古墳（斐川町）、神庭岩船山古墳（斐川町）などがある。

後期後半以降になると、今市大念寺古墳、上塙治築山古墳など出雲地方最大級の横穴式石室を有する大形の古墳が築造されるようになる。また、南の丘陵には上塙治横穴墓群、神門横穴墓群など大規模な横穴墓群も築かれる。この時期の出雲平野は出雲地方における古墳文化の中心地の一つであり、それ以前とは様相を画する。

奈良時代以降 この時期になると神門寺境内廃寺、長者原廃寺、天寺平廃寺（斐川町）などの古代寺院が建造されるとともに、光明寺3号墓をはじめ、小坂古墳の石櫃や朝山古墓などの初期火葬墓が多く確認され、いち早く仏教文化が取り入れられていたことが窺える。特に出雲地方出土の石櫃は神戸川周辺に集中しており、地域的特色となっている。

第2章 調査・研究略史

西谷墳墓群の発見は1953年まで遡り、4号墓開墾中に多量に土器が発見されたことによる。しかしながら、この時点では墳墓としての把握はされていない。1958年にはこの時発見された土器を発見者の池田満雄氏が「下来原西谷遺跡出土土器」として、出土地を「下来原西谷丘陵遺跡」として報告された。

その後10年以上この遺跡に対する研究・報告は特になされなかつたが、1971年にそれらの出土土器の中に特殊壺形土器・特殊器台形土器が含まれることが報告され、にわかに西谷丘陵への関心が高まつた。翌年島根県立出雲商業高等学校移転に伴う島根県教育委員会による事前の分布調査によって西谷1号墓（来原1号墓）が発見されることにより、西谷丘陵に墳墓の存在が初めて確認された。同年、同1号墓が崩壊の恐れありとして出雲市教育委員会による緊急発掘調査が行なわれ、これにより新たに番外1、2号墓が発見されるとともに西谷1号墓が四隅突出型墳丘墓であることも確認された。

以来、島根県教育委員会の分布調査や出雲考古学研究会の精力的な活動によって1980年までには四隅突出型墳丘墓6基を含む墳丘を有するもの14基、墳丘を有さないもの3基、計17基の墳墓が確認され、出雲考古学研究会は主な墳墓の墳丘測量などの成果を含めた報告を『西谷墳墓群』として刊行された。これにより当遺跡に西谷墳墓群の名称が与えられることとなった。

1983年から1992年にかけては、島根大学を中心とした調査団によって西谷3号墓の2期に渡る発掘調査が行なわれ、貼石・配石構造、主体部の棺・槨構造、第1主体・第4主体の合計約300個体にも及ぶ供献土器、第4主体の上部施設として壮大な墓上施設が確認されるなど、多くの貴重な成果があげられた。なお、調査を担当された渡邊貞幸氏は、墳丘及び第1主体の調査報告の中すでに後述する17~20号墓がマウンドを持つ墳墓であることも指摘されている。

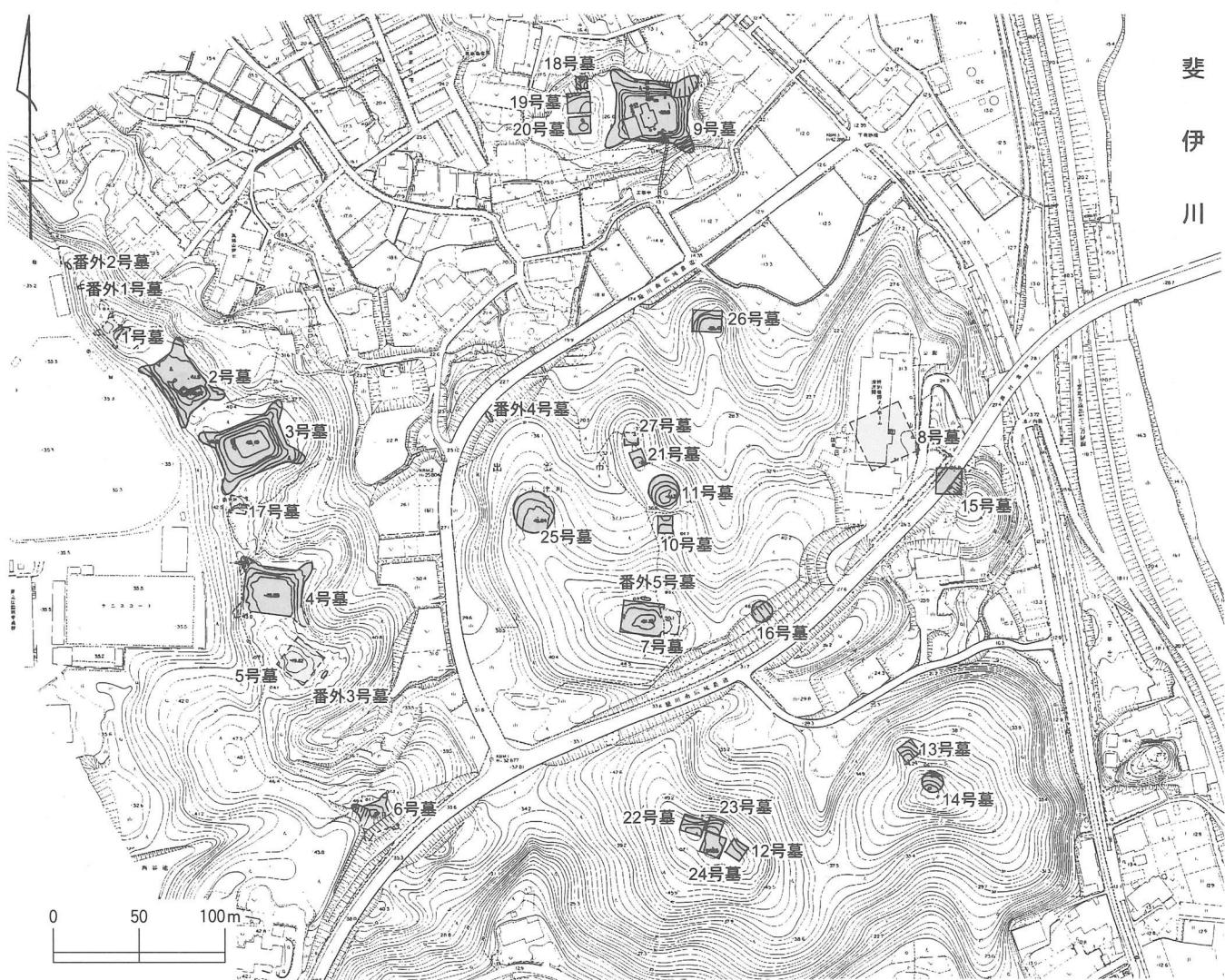
また、1991年から1992年にかけては、簸川南地区広域営農団地農道整備事業に伴って、農道ルート上に15、16号墓、番外4号墓が新たに発見され、これについて出雲市教育委員会が発掘調査を実施した。これにより15号墓は古墳時代中期の方墳で、16号墓は同時期の円墳、番外4号墓は時期不明の土壙墓であることが明らかになった。その後15、16号墓、番外4号墓は農道工事のため破壊された。

1997年から1998年にかけては、出雲市教育委員会が遺跡の詳細な分布調査及び測量調査を実施し、17~26号墓までの墳丘墓を確認するとともに、未測量の墳墓についての正確な地形測量を行なった。

その後、今回の調査前及び調査中に新たに27号墓、番外5号墓も発見され、西谷墳墓群が四隅突出型墳丘墓6基を含む、墳丘を有するもの27基以上、墳丘を有さないもの5基以上、計32基以上の墳墓からなる。少なくとも弥生時代後期後半と古墳時代中期頃に造営された大墳墓群であることが確認されている。

参考文献

- 池田満雄「下来原西谷丘陵出土土器」『出雲市の文化財』第1集 出雲市教育委員会 1958年
- 近藤 正・前島己基「島根県松江市的大場土壙墓」『考古学雑誌』第57巻第4号 日本考古学会 1971年
- 門脇俊彦「また出た発生期の古墳」『季刊文化財』17号 島根県文化財愛護協会 1972年
- 門脇俊彦「西谷墳墓群」『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1980年
- 出雲考古学研究会『古代の出雲を考える2－西谷墳墓群－』 1980年
- 渡辺貞幸他「西谷墳墓群の調査（I）」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』 島根大学法文学部考古学研究室 1992年
- 渡辺貞幸「弥生墳丘墓における墓上の祭儀－西谷3号墓の調査から－」『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会 1993年
- 『簸川南地区広域営農団地農道整備事業に伴う西谷15・16号墓発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1993年
- 『西谷墳墓群測量調査報告書』 出雲市教育委員会 1998年



第2図 西谷墳墓群分布図

第3章 調査の概要

今回発掘調査の対象としたのは、西谷墳墓群の主要墳墓のうち未だ内容が不明瞭な墳墓の2号墓、4号墓、5号墓、6号墓、7号墓、その他小墳墓ではあるが崩壊の危険ありと判断した17号墓、石棺が露出していた番外3号墓、7号墓調査中に発見した番外5号墓の計8基の墳墓である。

墳丘規模と形態、築造時期の確認を主な調査目的とし、トレンチ及び崩落面断面確認を基本とした調査を進めた。掘削作業は全て手掘りによって行ない、遺物取り上げ、遺構検出を行なった。検出した遺構については遺構図・土層図作成、写真撮影などによる記録を行なった。調査後は必要と思われる箇所を土嚢等で補強し、全てのトレンチの埋め戻しを行なった。

(1) 2号墓の調査

1. 墳丘の現状（第3図）

西谷2号墓は西谷と兎谷に挟まれて北北西方向に派生する支丘尾根上、標高約41mに立地する四隅突出型墳丘墓である。北西には1号墓が、南東には3号墓が尾根沿いに隣接しており、その間に丘陵の幅いっぱいを利用して築造されている。

墳墓周辺の現況は山林であるが、戦後の一時期は畑として利用されていたようである。マウンドの北西側は、明治初年～戦後間もなくまで行なわれた陶土採土によって大部分が削平されており、現在地表からは北西～南東約12m、南西～北東約15m程度、頂部平坦面北西～南東幅約10m程度の長方形状残丘としてのみ確認できる。ただし、丘陵南西側斜面では標高40m付近に等高線の広がりが確認できる他、南側突出部付近及び南東辺の一部ではボーリングによって配石が確認でき、本来の墳裾の痕跡が窺える。

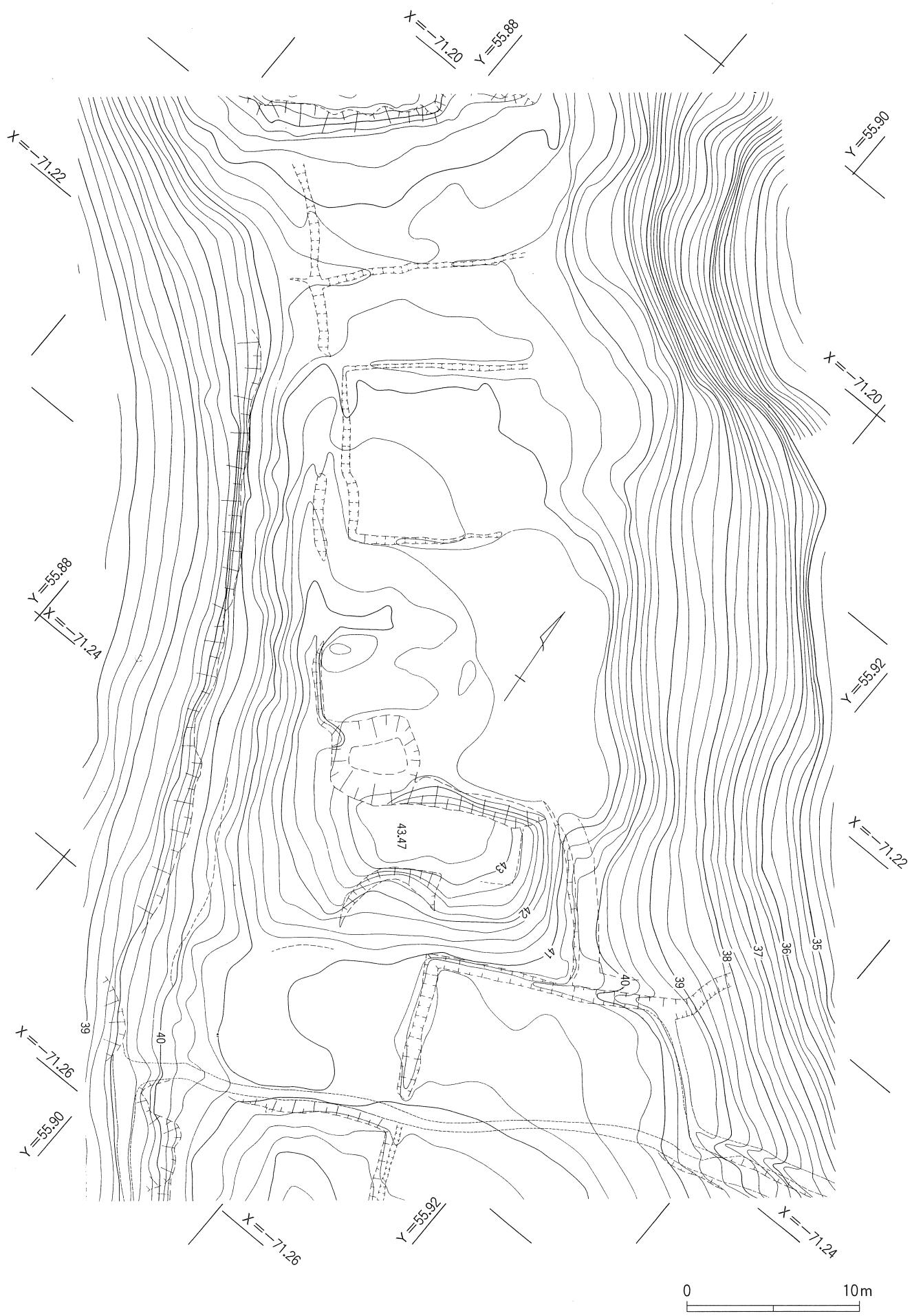
1980年に出雲考古学研究会によって行なわれた残丘の北西側削平部断面調査では、深さ50cm程度の土壙2基が平坦面の南西側端付近で確認されたほか、この部分では赤褐色土地山に50cm程度の盛土が施されていることも確認されている。⁽¹⁾

2. トレンチの配置（第4図左上）

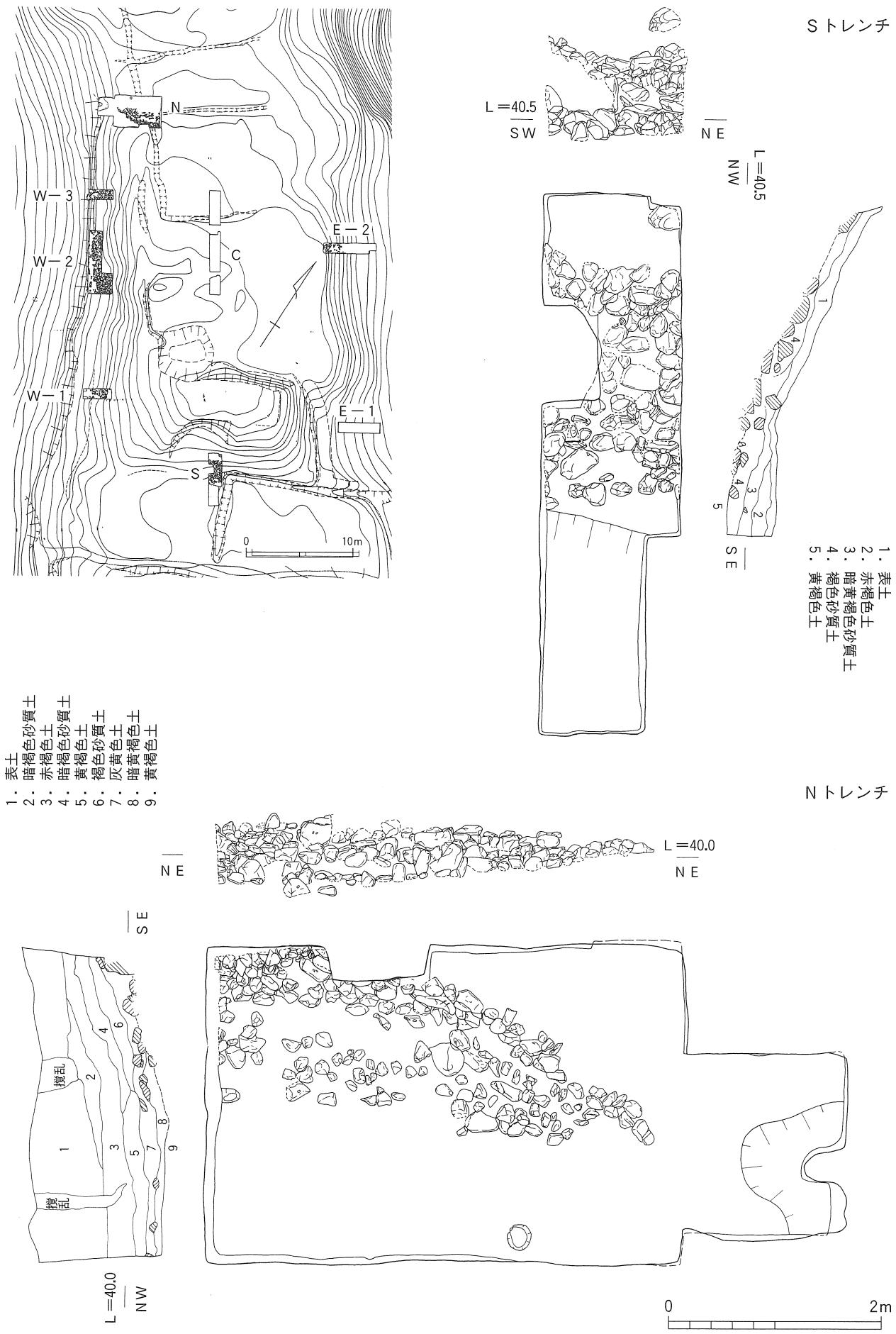
トレンチの設定は1m幅の長方形を基本とし、長さについては地形に応じて決定した。ただし、検出した遺構が1m幅では不充分と判断したトレンチについては状況に応じて拡張を行なった。また、トレンチの方向は、見かけの墳丘主軸方向に対して平行もしくは直行して設定した。

トレンチの名称については便宜上墳丘の南東側裾部に設定したものをSトレンチ、北西側裾部に設定したものをNトレンチ、南西側裾部に設定したものをWトレンチ、北東側裾部に設定したものをEトレンチ、墳丘の主軸上削平部に設定したものをCトレンチとし、複数トレンチを設定したW、Eについては南東から順に通し番号を付した。

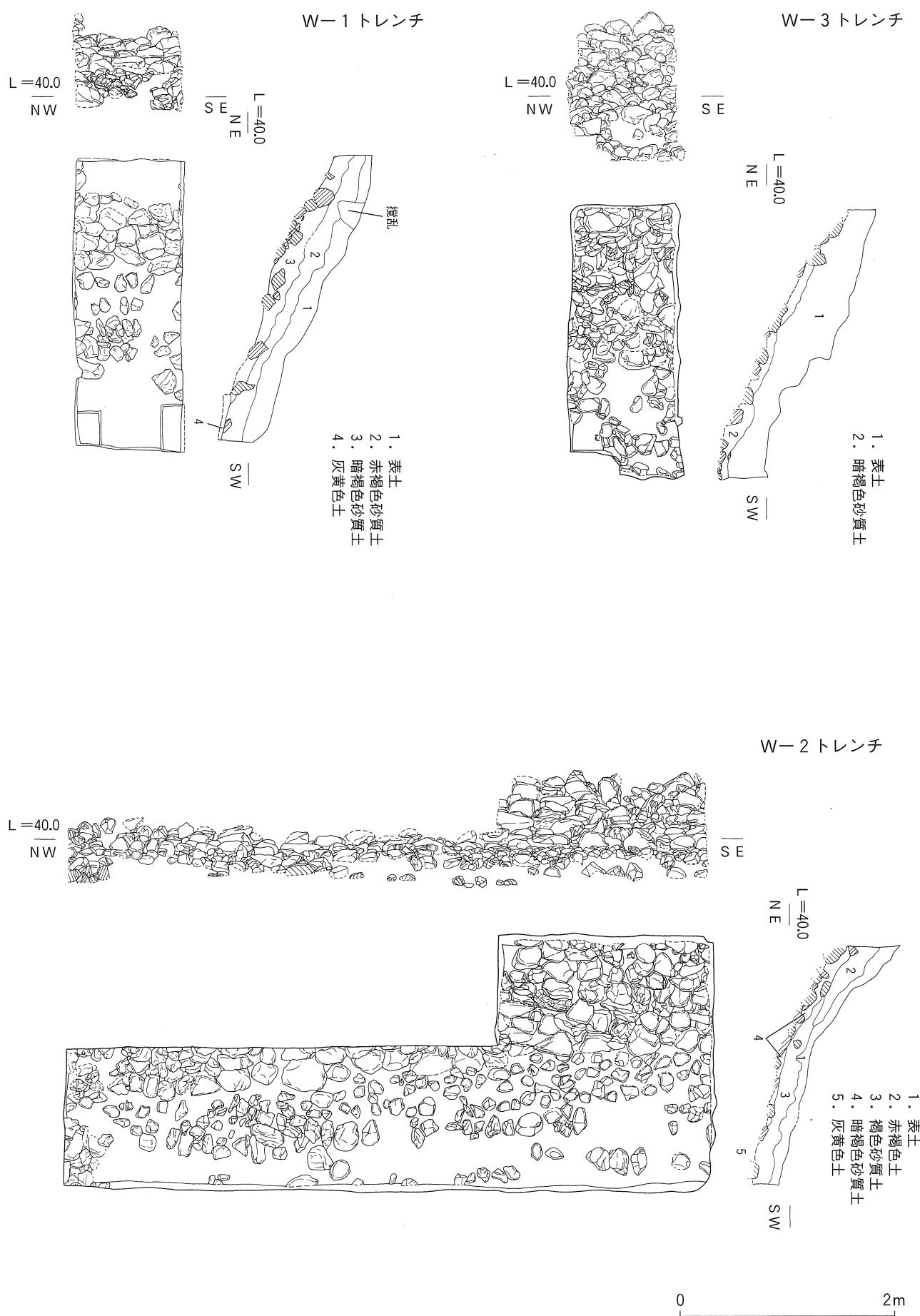
3. 墳丘の形態と規模（第4図～第6図）



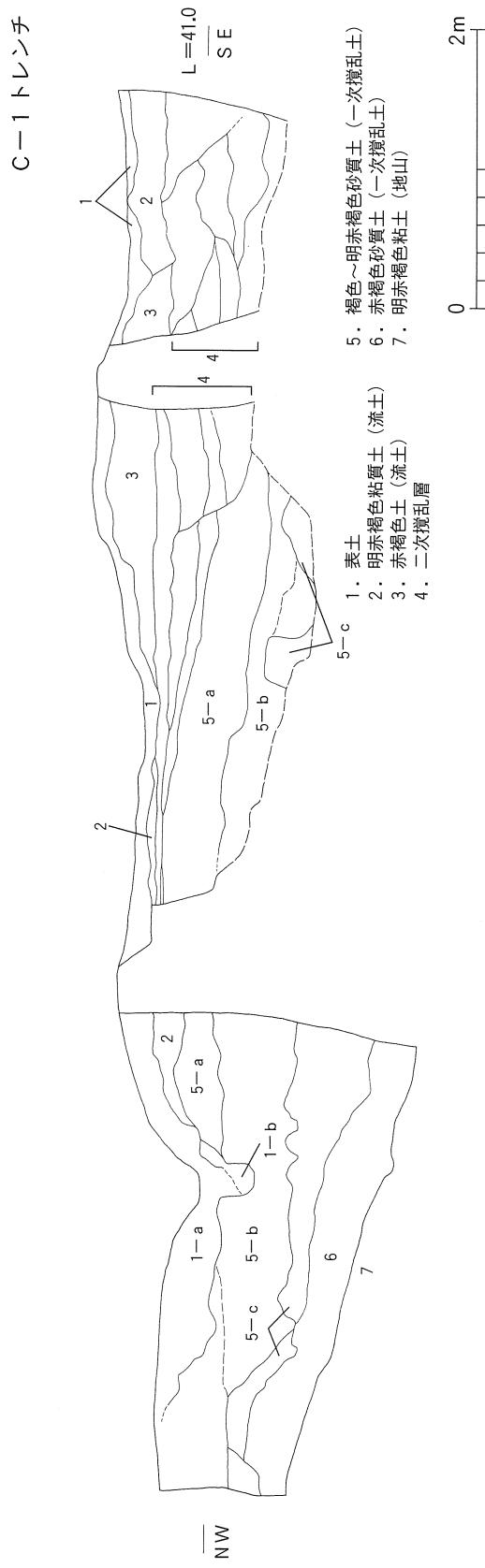
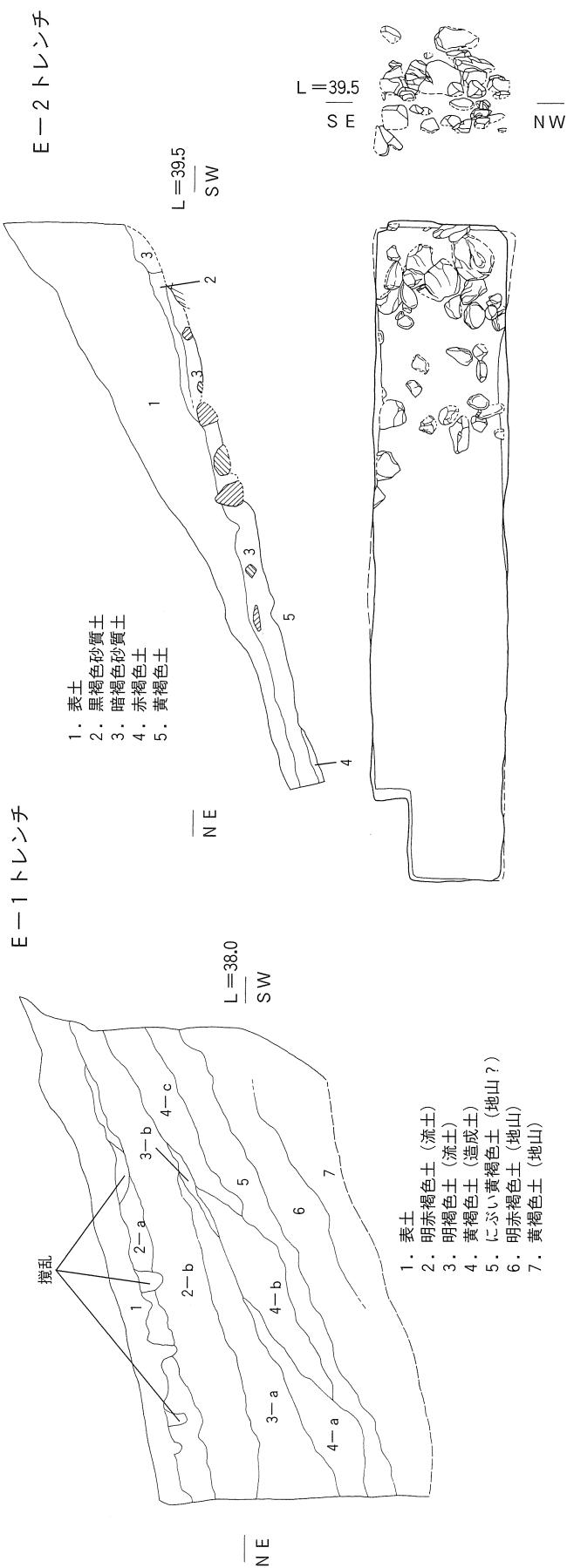
第3図 西谷2号墓墳丘測量図（島根大学考古学研究室原図）



第4図 西谷2号墓トレンチ実測図-1



第5図 西谷2号墓トレンチ実測図－2



第6図 西谷2号墓トレンチ実測図-3

a. 配石構造

墳丘の配石は、南東・南西・北西の裾付近に設定したトレンチ（S、W-1～3、Nトレンチ）において、比較的良好な状態で確認できた。使用された石は20～50cm大の比較的大きめの河原石と20cm大以下の比較的小さめの河原石・山石であった。

墳丘斜面は、墳丘上に密に石を貼りめぐらしており、その多くは石の下部が墳丘盛土に入り込むような形で貼られていた。使用された石は大きめの河原石が多く、S・W-2トレンチでは斜面の下端近くで比較的大形の偏平な石を多用する傾向も観察される。斜面貼石の下端の標高は南東辺で約40.5m、北西・南西辺で約40mを測り、北東辺は推定で39.5m～40m程度と思われる。

斜面貼石外方には2列の敷石及び列石が確認された。貼石裾から幅40～60cmの平坦面がめぐり、平坦面には25cm大以下の比較的小形の石が敷きつめられていた。この平坦面敷石の外周には30～20cm大の偏平な石を立て並べた列石がめぐらされる。この列石の外方には、もう1段同様の平坦面敷石及び列石が、内側のそれより10～20cm低いレベルでめぐっていたことがSトレンチ、Nトレンチで確認される。貼石裾より外周列石までの幅はどちらのトレンチにおいても概ね1m程度である。ただし、この幅に関する数値は突出部分においては例外であるようで、Nトレンチでは突出部先端に向かうほど平坦面の幅が狭くなっている。

b. 突出部の形態

Nトレンチにおいて西側突出部の一部を確認した。遺存状態はあまり良くなく、上面や先端部はすでに削られていて原形をとどめていない。

裾部の配石は、良好な状態の残りではなかったが、2重の敷石・石列が確認されている。すでに前述したように、墳丘方形部裾にあたる部分では貼石下端から外周列石まで約1mの幅で配石が施されているが、突出部裾にあたる部分ではその幅は狭くなり、残存部最小幅50cm程度にまでなる。

突出部の北西側基部は、Nトレンチ北東端より約2mの位置と考えられ、この部分から貼石の屈曲、裾部配石幅縮小が顕著になっている。

西側突出部の形状をN、W-2トレンチの検出状況から図上復元すると、基部幅7～8m、長さは墳丘の北東辺と南西辺の延長線交点から4～5m程度はあったものと思われる。なお、貼石下端のレベルは約40m、外周敷石のレベルは39.8～39.9m程度である。

c. 墳丘の復元

墳丘の北東辺及び北西側の上部は原形が失われているが、北東辺についてはE-2トレンチにおける配石の痕跡から、上部平坦面については南東側の残丘からおよそその形状を推定することができる。

2重の貼石・列石の幅を約1mとし、その外周列石までを墳丘規模とすると、西谷2号墓の墳丘の復元規模は以下のようになる。

方形部規模	北西-南東約35m、南西-北東約24m
突出部含む規模	北西-南東約42m以上、南西-北東約30m以上
頂部平坦面	北西-南東約21m、南西-北東約11m
高さ	貼石下端約3～3.5m、外周敷石下端約3.1～3.7m (北東辺はさらに50cm程度高くなる可能性あり。)

⁽¹⁾
墳丘は1980年の断面調査でも確認されているように、地山整形後盛土（墳丘南東側で約50cm程度の盛土）で造形されているよう、北西側でも貼石下端から少なくとも1m以上は地山整形であったであろうことがCトレンチの地山残存状況から推定される。また、E-1トレンチでは狭い丘陵尾根に突出部を築くための墳丘基盤造成土の可能性がある土層も確認されている。

4. 出土遺物（第7図～第11図）

今回のトレンチ調査では、Cトレンチ、W-1・2・3トレンチで弥生土器、須恵器が確認されている。CトレンチとW-3トレンチの遺物以外は全て小片で風化が著しいもので、ここではCトレンチの弥生土器とW-3トレンチの須恵器のみを図化した。

a. Cトレンチ出土遺物

Cトレンチでは、搅乱土層より壺・鼓形器台・低脚壺、吉備系の特殊壺・小形特殊器台が出土している。

第7図1～5は壺である。1～2は口縁部の破片で、1は口径約20cmで器壁幅5～9mmの厚手のもの、2は口径約12cmで器壁5mm以下の薄手のものである。いずれも頸部から大きく湾曲して直立し、端部付近でやや外反する複合口縁で、口縁外面に平行沈線は見られない。頸部は短く、体部内面にケズリがわずかに確認される。3～5は頸部から体部の破片である。3は頸部の屈曲が1～2に比べて鋭いが、2と同様の口径、器壁厚と推定される。いずれも体部には3～4条の平行沈線が1cm弱ごとに数段施され、その間に貝殻腹縁による刺突文を羽状に施されている。内面は風化著しいが、ケズリが施されていたものと考えられる。

第7図6～10は鼓形器台である。6は受部の破片で、外面ナデ、内面ミガキ調整が施される。7～8は筒部の破片で、貝殻腹縁による羽状刺突文が施されている。7ではその下に3条以上の平行沈線も観察できる。本来羽状文の上下に平行沈線が施されていたものであろうか。9～10は脚部の破片である。9では径の復元が可能で、復元脚径約20cmとなる。内面はケズリが施され、外面は平行沈線をナデ消している。10も9と同様の形状のものかと推測されるが、風化著しく外面ナデのみが確認される。

第7図11は低脚壺の破片である。壺部及び脚端部は欠損しており、全形の把握はできないが、脚部径は5～6cm程度と推定される。風化著しく、調整も観察できない。

以上のいずれの個体も石英・長石等の小砂粒を多く含むものが多く、にぶい黄橙色もしくは橙色を呈する。赤色顔料等の塗布は観察されなかった。

第8図1～3は特殊壺もしくは小形特殊器台の口縁部である。二重口縁で、口縁外面には櫛状工具による6～7条の平行沈線が施される。口縁帶の長さは口縁端部から下端までの直線距離で4cm前後を測る。1、3では口縁端に平坦ぎみの面があるが、明瞭なものではない。口径は1で復元でき、復元径約34cmを測る。内外面ともに丹が塗布されていた形跡がうかがえる。

第8図4～7は小形特殊器台の脚部である。4～5は脚裾部の破片で、外面には6～7条の平行沈線の上下に列点文を廻らせる文様が2段以上あり、その間に方形のスカシが穿孔される。内面には縦、横のケズリが施される。残存部復元径最小値は4で約13cmを測る。また、4では内外面で、5では外面で丹が塗布されていた痕跡がうかがえる。6～7は脚端部の破片で、短い直立部を持ち、内傾する

裾部との変換点には突帯が廻る。6は風化著しく文様、調整等不明だが、7で直立部及び裾部外面に櫛状工具による平行沈線が明瞭に観察される。脚端部径は小片からの復元であるが、6で約31cm、7で約37cmである。丹が塗布されていた痕跡は確認できなかった。これらの脚端部片は大形の特殊器台のものである可能性も残る。

第8図8は特殊壺頸部の破片である。外面に12条以上の平行沈線が廻る。頸部復元径は約10cm、頸屈曲部以下残存高は約6cmを測る。外面で丹が塗布されていた痕跡がうかがえる。

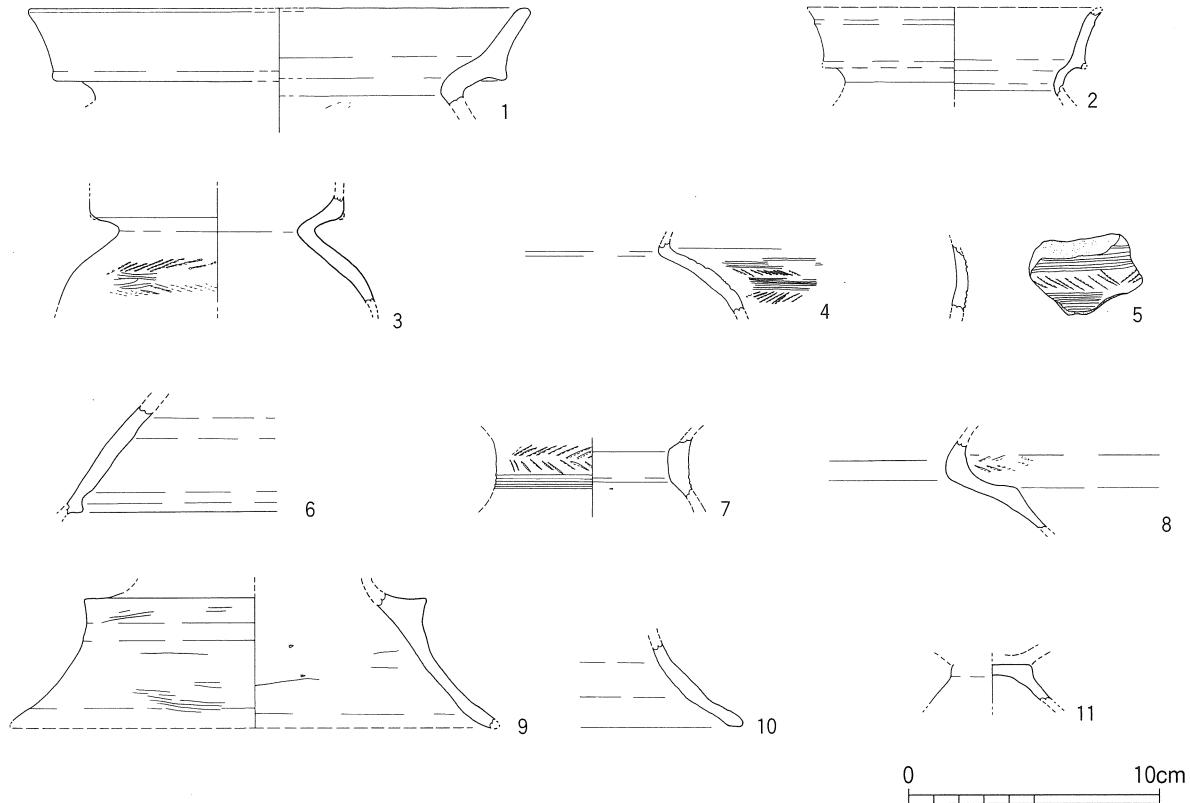
第9図は特殊壺体部である。やや幅広の低い突帯を2本以上有し、突帯間には鋸歯文が施される個体もある。また、最上段突帯の上には平行沈線も確認できる。体部最大径は復元で27~37cmである。外面で丹が塗布されていた痕跡がうかがえる。

第8~9図の土器は石英・長石・金雲母を含み、にぶい赤褐色もしくは暗褐色を呈する。

b. W-3 トレンチ出土遺物

W-3 トレンチでは弥生土器細片数点と須恵器灯明皿2個体が出土している。

第10図は須恵器灯明皿である。口縁部で急敵に外反し、外方に平坦面をもって端部をおさめる。底部には回転糸切痕が残る。1で口径9cm、底径5.5cm、2で口径10cm、底径6cmを測る。いずれも器高は約3cmである。時期は平安期前後のものであろう。これらの須恵器灯明皿は、W-3 トレンチの

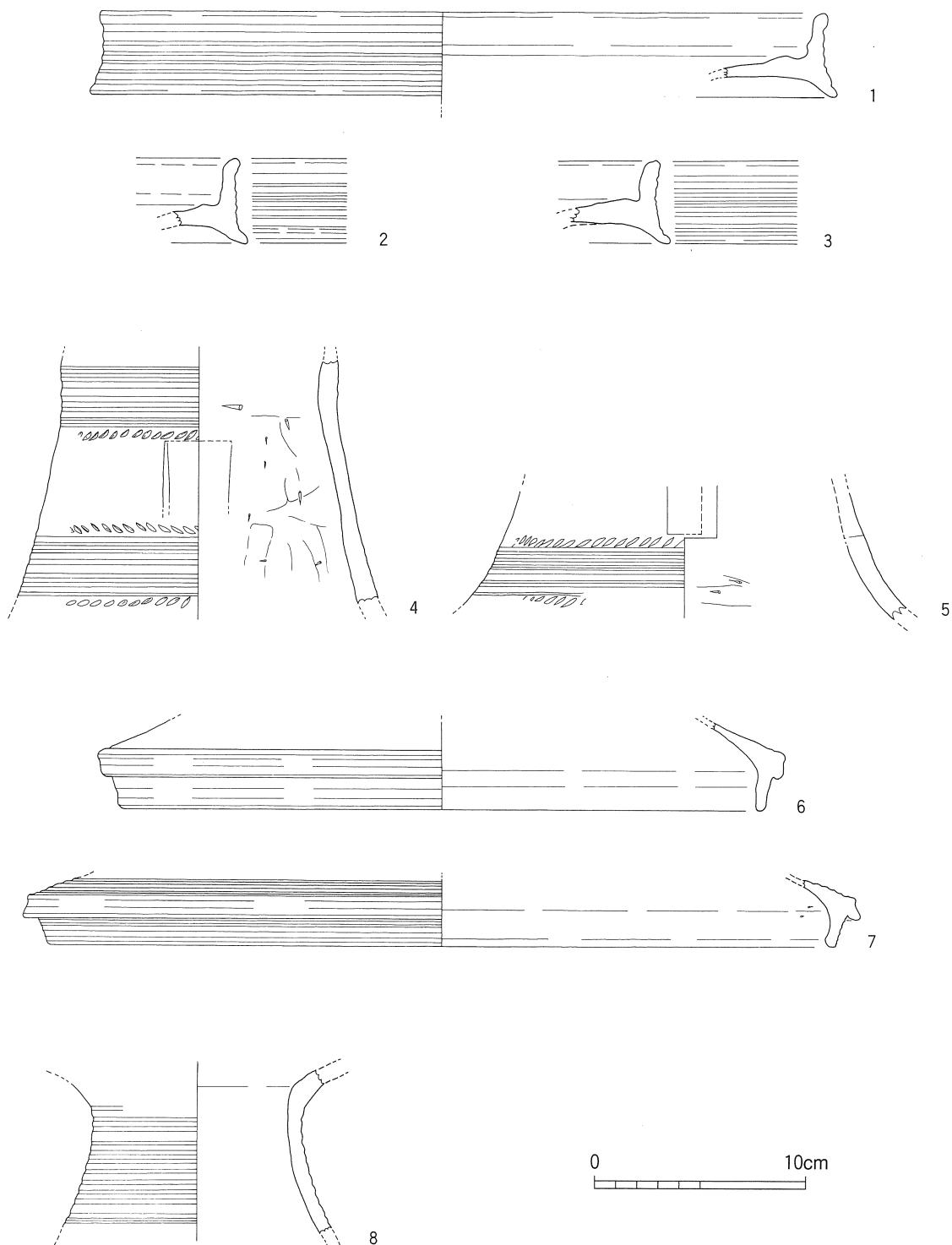


第7図 西谷2号墓Cトレンチ出土遺物実測図-1

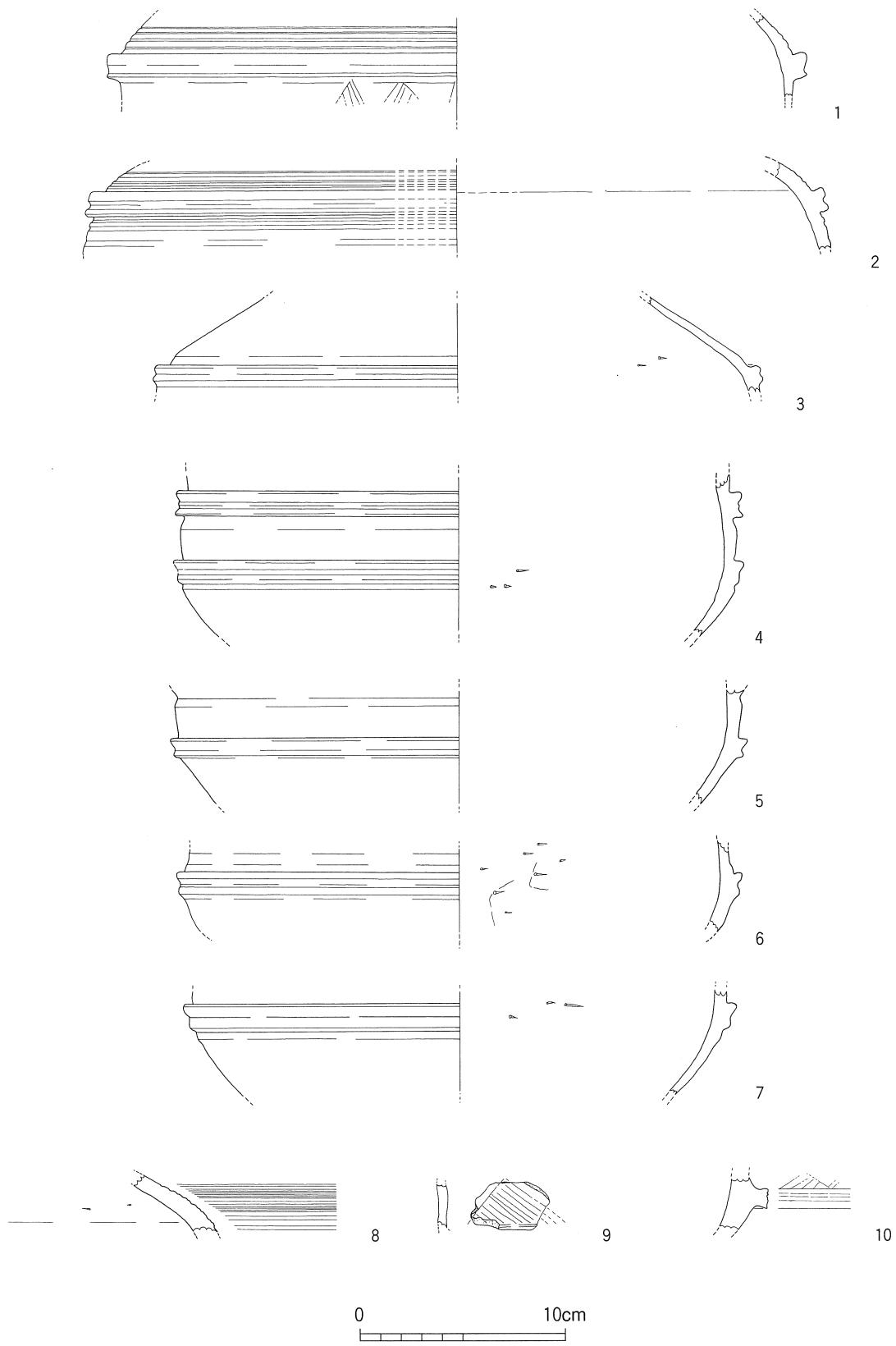
標高39.7m付近、石材が一部排除されている箇所から出土したもので、意図的に置かれていた可能性がある。墳丘墓築造後500年以上後の時代にあっても西谷丘陵の墳丘墓群は神聖なものとして祀られていたのかもしれない。

c. 出雲考古学研究会採集遺物⁽¹⁾

第11図は1980年に報告のある西谷2号墓の採集遺物で、今回の報告にあわせて再度観察し、実測を



第8図 西谷2号墓Cトレンチ出土遺物実測図－2



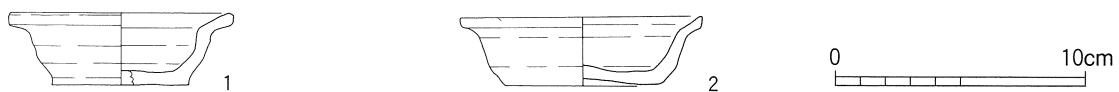
第9図 西谷2号墓Cトレンチ出土遺物実測図－3

行なったものである。前述までに報告した遺物と特徴の異なるものも存在しており、これらの土器についても若干の説明を加えておく。

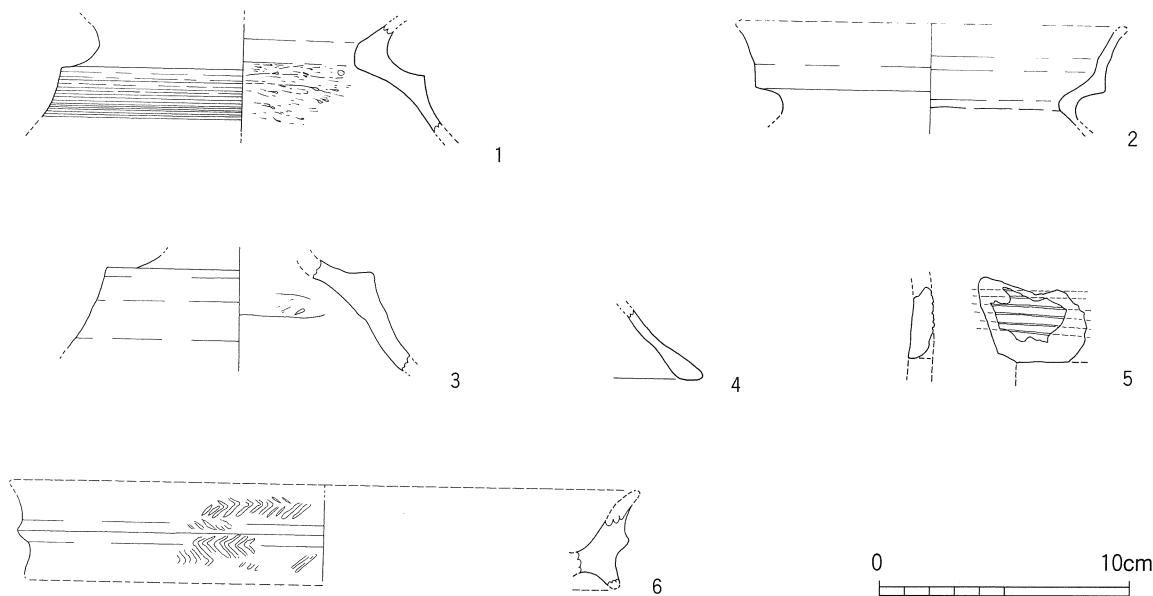
1、3は鼓形器合の脚部である。1では浅いながらも櫛状工具による平行沈線が明瞭に残っている。3については外面調整は風化のため不明である。いずれも内面にケズリ確認される。

2は壺口縁部である。薄手の器壁のもので、端部付近でやや外反する複合口縁である。調整は風化のため不明である。

5は器台胴部、6は器台もしくは壺の口縁部または脚部と考えられる。5では平行沈線文とスカシが確認される。6では口縁（脚端？）立ち上がりの中程に稜を持つ特殊な器形で、連続した羽状文のような文様が廻っている。これらの土器は在地系のものではないようだが、色調は黄橙～橙色で、胎土も在地土器のそれに近いものである。赤色顔料等の塗布の痕跡も確認できなかった。



第10図 西谷2号墓W-3トレーナー出土遺物実測図



第11図 西谷2号墓採集遺物実測図

(2) 4号墓の調査

1. 墳丘の現状（第12図）

西谷4号墓は2号墓と同一丘陵尾根上、2号墓から3号墓を挟んで南南東に約150mの位置、標高約43mに立地する四隅突出型墳丘墓である。南側には5号墓が隣接している。2号墓と同様に丘陵幅いっぱいを利用して築造されている。

墳墓周辺の現況は山林であるが、戦後しばらくまでは墳頂部が畠として利用されており、その開墾中に出土した土器が西谷墳墓群の発見の契機ともなっている。⁽²⁾南西・南東側の突出部は、地形を観察する限りでは残存していないようであり、北西側突出部も山道としての掘削が行なわれている。北東側突出部のみが地形上からも明瞭に確認できる。方形部裾付近については大幅な地形の改変は受けていないようである。地表からは方形部の東西長約34m、南北長約27mのマウンドとして確認できる。⁽³⁾また、南及び東辺の一部ではボーリングによって配石の存在が確認され、北西突出部カット面南東壁でも北辺の配石が露出している。

2. トレンチの配置（第13図左上）

トレンチの設定は幅1mの長方形を基本とし、長さについては地形に応じて決定した。また、トレンチの方向は見かけの墳丘主軸方向に対して平行もしくは直行するよう設定を試みたが、当初考えていた主軸にそれが生じたためトレンチの配置は軸にそっていない。トレンチ調査の他、北西突出部カット面についても今回改めて断面調査を実施した。

トレンチの名称は西側裾部に設定したものをWトレンチ、南側裾部に設定したものをSトレンチとし、北西突出部のカット面は南東側をAライン、北西側をBラインとした。

3. 墳丘の形態と規模（第13図～第14図）

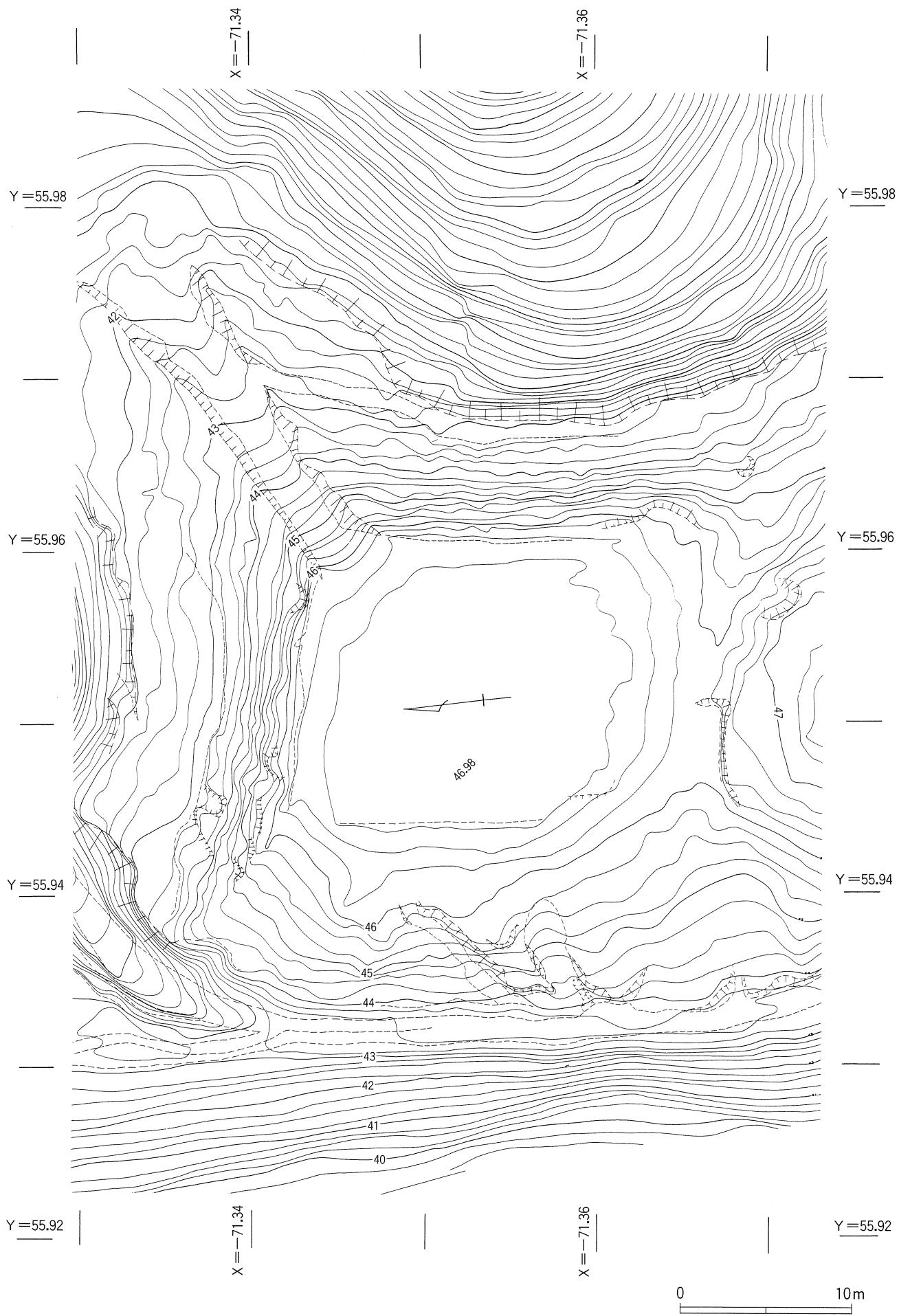
a. 配石構造

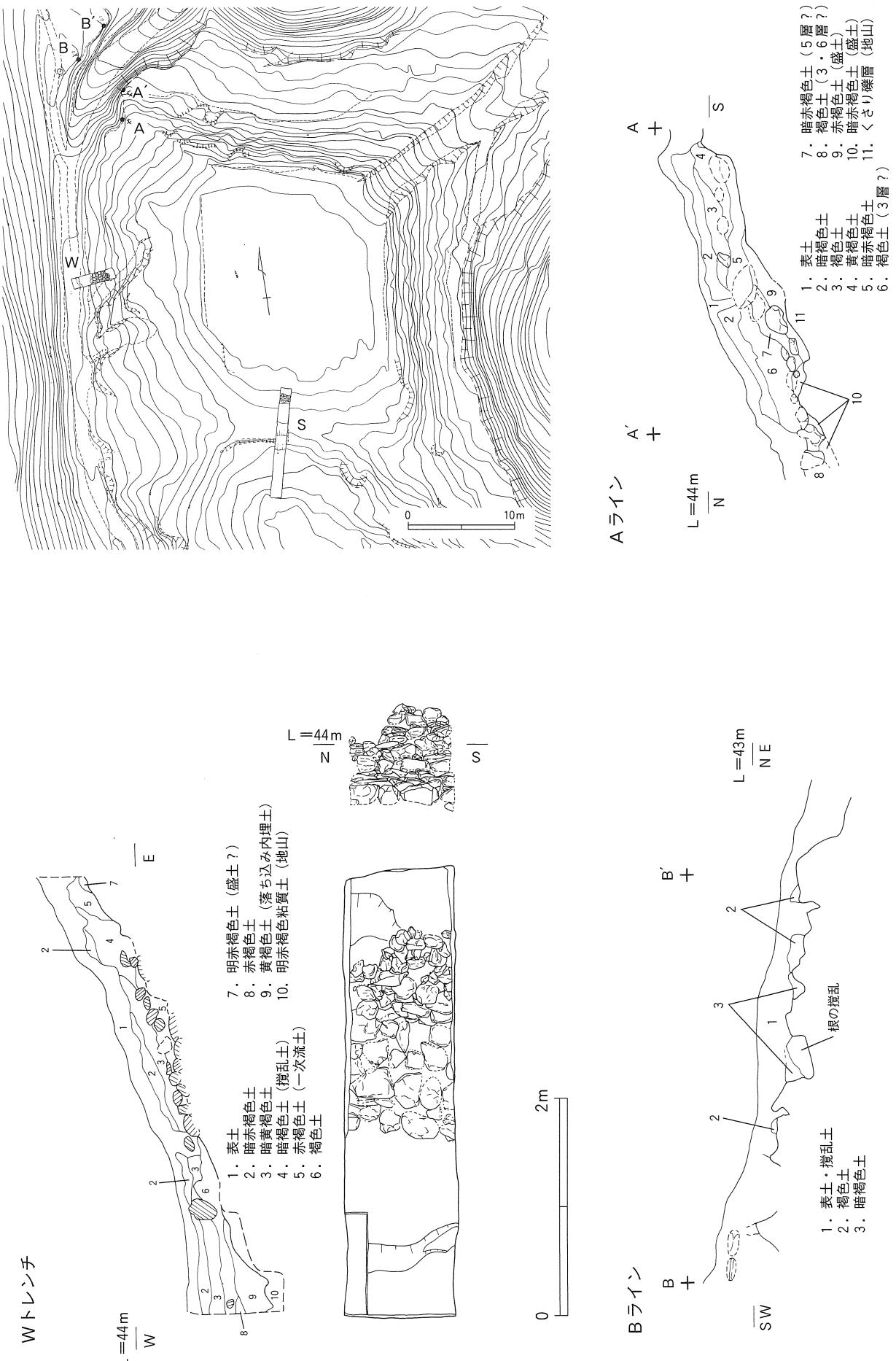
墳丘の配石は西裾・南裾に設定したトレンチ（Wトレンチ、Sトレンチ）において良好な状態で確認でき、Aラインでもその痕跡が確認できた。使用された石は20～60cm大の比較的大きめの河原石と20cm大以下の比較的小さめの河原石・山石であった。

配石の状況は西裾（Wトレンチ）と南裾（Sトレンチ）でやや異なっている。

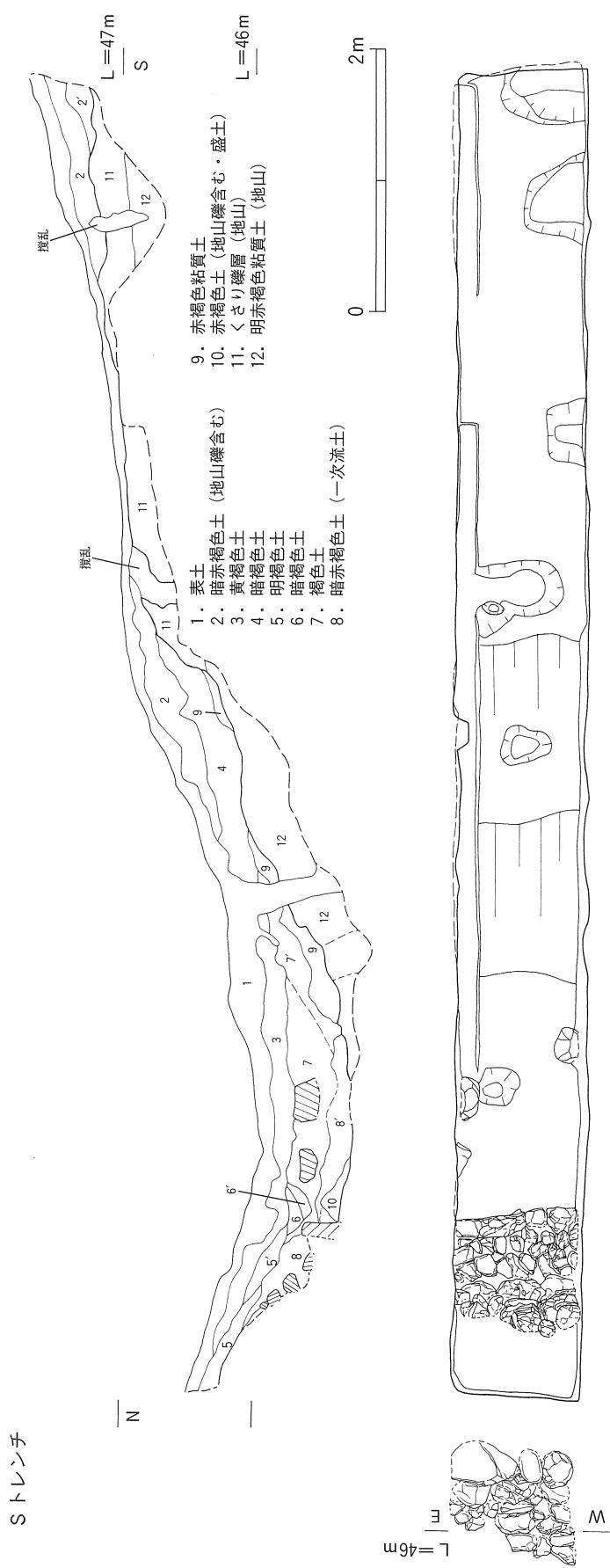
西裾では、墳丘斜面貼石は比較的小さめの石材を多用し、裾部付近のみ20cm大以上の河原石が多用される。斜面貼石下端の標高は43.7mを測る。斜面貼石外方には1列の敷石及び列石が確認された。これらの石材には20cm大以上の大きめの偏平な河原石が多用されている。貼石裾から約80～90cm幅の平坦面に敷石が敷きつめられ、その外側に20～40cm大の偏平な石を立て並べた石列がめぐらされる。列石上端は貼石下端及び敷石の標高とほぼ同様で、列石下端はそれより20～30cm低くなっている。貼石下端から列石外側までの幅は約1mである。

南裾では、斜面貼石の石材は同様だが、その傾斜は西側斜面よりかなり急になっており、「貼る」というよりも「積む」ように配石されている。斜面貼石下端の標高は45.6mを測り、西側裾と2m近くの高低差がある。斜面外方にはやはり1列の敷石及び列石が確認されるが、平坦面敷石の幅は30～40cmと狭い。敷石の石材は20cm以下の小形のものばかりを密に敷きつめている。列石には20～60cm大の偏平な石を立て並べてめぐらされている。列石上端は貼石下端及び敷石の標高とほぼ同様で、列石





第13図 西谷4号墓トレーニチ実測図-1



第14図 西谷4号墓トレンチ実測図－2

下端はそれより20~30cm低くなっている。貼石下端から列石外側までの幅は約50cmである。

また、北西突出部カット面の断面調査では、Aラインで墳丘北裾の貼石、敷石、列石の痕跡が確認でき、標高約43.3mで貼石下端が、その外方約80cmの敷石平坦面、さらにその外方の列石が認められる。標高差以外は基本的に西裾と同様であるが、敷石に小形の石材が多用されている。列石下端の標高は約43mである。なお、Bラインでは搅乱・削平が当時の墳裾の標高以下まで達しているよう、原形の痕跡は確認できなかった。

b. 墳丘の復元

今回確認した墳丘裾は南辺と西辺、突出部のカーブにすでに入っていると思われる部分の北裾のみであるが、これらの結果とその外観からおおよその形状は推定することができる。貼石・石列の幅を南辺で50cm、その他の辺で1mとし、その外周を墳丘規模とすると、西谷4号墓の墳丘の復元規模は以下のようになる。

方形部規模

南北約27m、東西約34m

突出部含む規模

長辺40m以上

頂部平坦面

一辺約17m

高さ

貼石下端約1.4~3.7m

列石下端約1.7~4m

(北方がより高く、南方が低い。)

墳丘は丘陵を切斷した地山を利用して築かれており、Sトレンチでは墳丘の南側地山を大きくカットした痕跡が確認できる。盛土も使用されているが、頂部付近や斜面表面、突出部などの整形に主に使用されているものであろう。

また、墳丘との直接の関連性は不明だが、Wトレンチの西端で深さ30cmほどの落ち込みが確認されている。土層の堆積状況からも墳丘築造時に近い時期のものと推定され、あるいは周辺埋葬の土壙墓であるかもしれない。

3. 出土遺物（第15図）

今回のトレンチ調査では、Wトレンチ、Sトレンチいずれも弥生土器

が確認された。また、調査中に表採された遺物もある。Sトレンチから出土した遺物は全て小片で風化著しいものであったため、ここではWトレンチの出土遺物（1、3）と表採遺物（2）のみを図化した。2についてはWトレンチ南方約5mの墳丘斜面で採集されたものである。

1～2は鼓形器台の破片である。1は筒部、2は脚部だが、いずれも風化が著しく調整等は不明である。比較的大形の鼓形器台で、復元では脚部端は22cm以上となる。石英・長石を多く含み、にぶい黄橙色～橙色を呈する。

3は特殊壺の口縁部の破片である。二重口縁で、口縁外面には櫛状工具による6条の平行沈線が施される。口縁帶は上下端とも丸くおさめ、その長さは口縁端から下端までの直線距離で約3.3cmを測る。口径は復元で約24cmとなる。少なくとも外面には丹が塗布されていた痕跡がうかがえる。胎土は石英・長石・金雲母を多く含み、にぶい赤褐色を呈する。

(3) 5号墓の調査

1. 墳丘の現状（第16図）

西谷5号墓は4号墓の南東に隣接して、標高約47mの丘陵尾根上に築かれている墳丘墓である。その地形から、従来より前方後方形墳墓と推定されている。⁽¹⁾

墳墓の現況は山林であるが、過去の採土によって地形の改変が著しい。これを前方後方墳とすると、両側くびれ部付近はかなりの範囲で削平されており、後方部南東側一帯もすでに地山が露出している。地表からは南南東ー北北西方向に主軸をとり南南東側に後方部を持つ前方後方形で、全長約38m、後方部長約22m、幅約20m、高さ約2.5m、前方部長約16m、幅約10m、高さ約0.75mの規模の墳墓として観察できる。⁽⁴⁾また、前方部頂部平坦面には土壙1基が存在すると、過去に出雲考古学研究会によつて報告されている。⁽¹⁾

墳墓のすぐ南東側には西谷番外3号墓として知られる小石棺墓も石材が露出した状態で確認できる。地元の方の情報によると、この番外3号墓は、過去に底部まで掘り起こされたことがあるとのことであった。

2. トレンチの配置（第17図上）

トレンチの設定は幅1mの長方形を基本とし、長さについては地形に応じて決定した。また、トレンチの方向は見かけの墳丘主軸に平行もしくは直行して設定した。

トレンチの名称については、便宜上みかけの主軸に沿って設定したものを南南東側から順にS、N-1、N-2トレンチ、主軸に直行して西南西側に設定したものをWトレンチ、東北東側に設定したものをEトレンチとし、W・Eトレンチについては南南東側から順に通し番号を付した。

また、名称は特に付していないが、これらのトレンチとは別に、すでに内部が掘り起こされている番外3号墓についても調査区を設定した。

3. 墳丘の形態と規模（第17図～第18図）

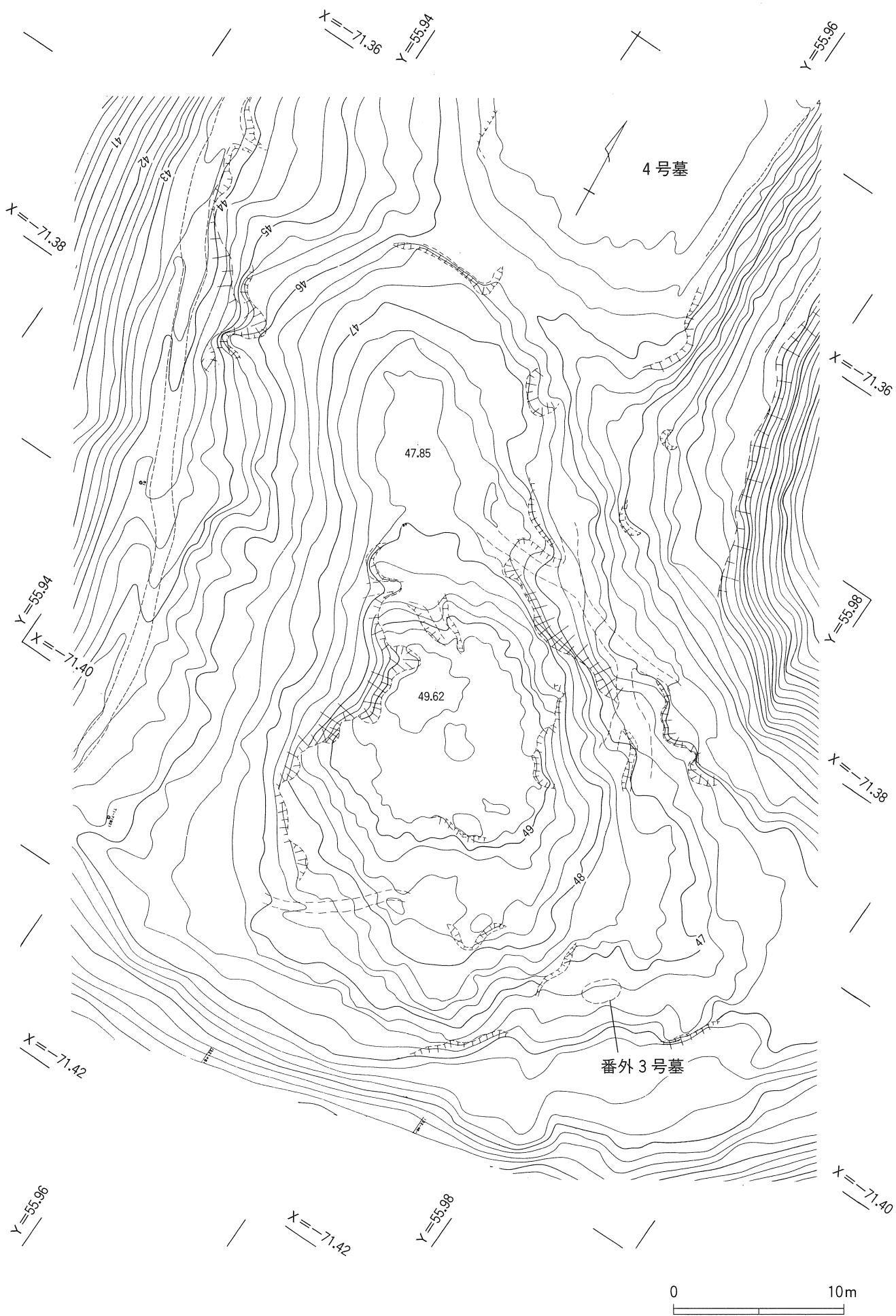
a. 墳丘残存状況

いずれのトレンチにおいても墳丘が良好な遺存状態では確認できず、E-2、W-2、3トレンチなどでは、地表の地形ほぼそのままの状態で地山が表土下に現れた。その他のトレンチにおいても墳裾は明瞭には確認できなかったが、W-1トレンチにおいて墳丘端及び墳丘盛土と思われる痕跡をわずかに確認できた。W-1トレンチにおける現状での墳端は標高47.4mの位置にあり、残存する墳丘の等高線は、墳墓を前方後方墳としてとらえた場合よりも南東ー北西側へ傾いている。また、配石等は全く確認されない。その他のS、N-1、E-1トレンチにおいても標高47.5m付近で傾斜の変換点が観察され、この墳墓が前方部を伴わない方形もしくは円形の墳墓であった可能性を思わせる。前方部にあたる部分においてもこれを墳丘とする積極的根拠は見いだせない。

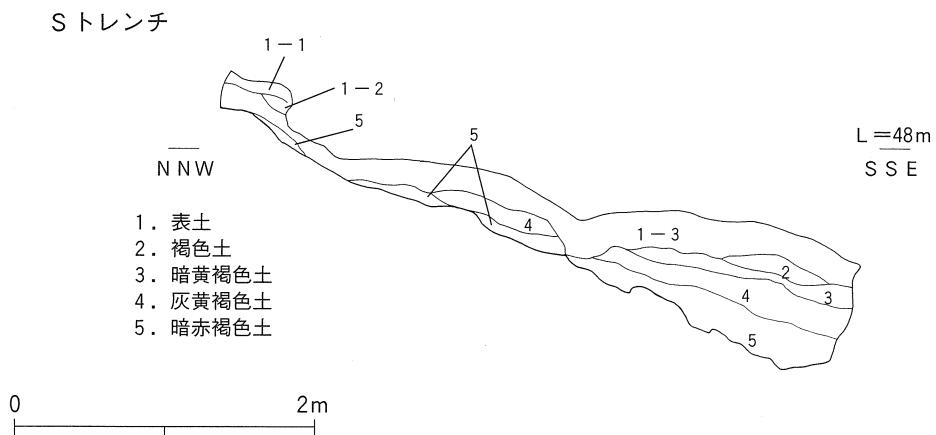
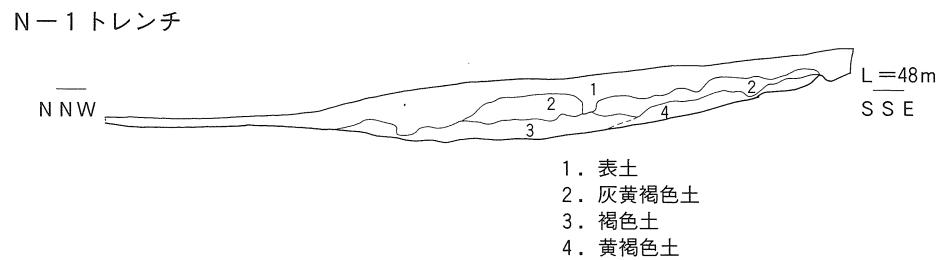
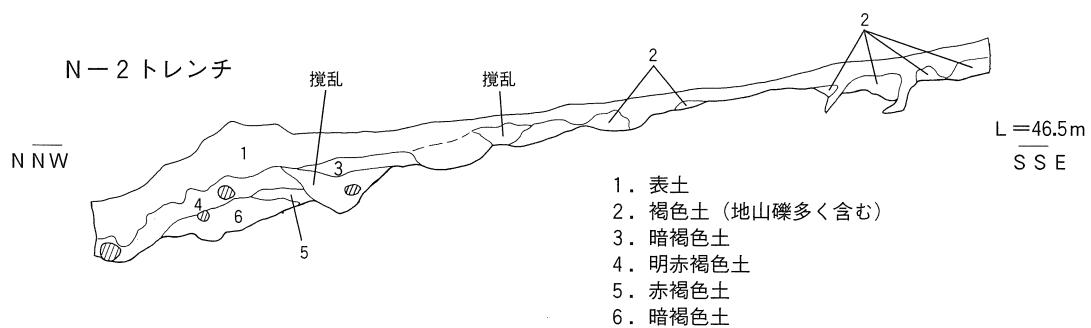
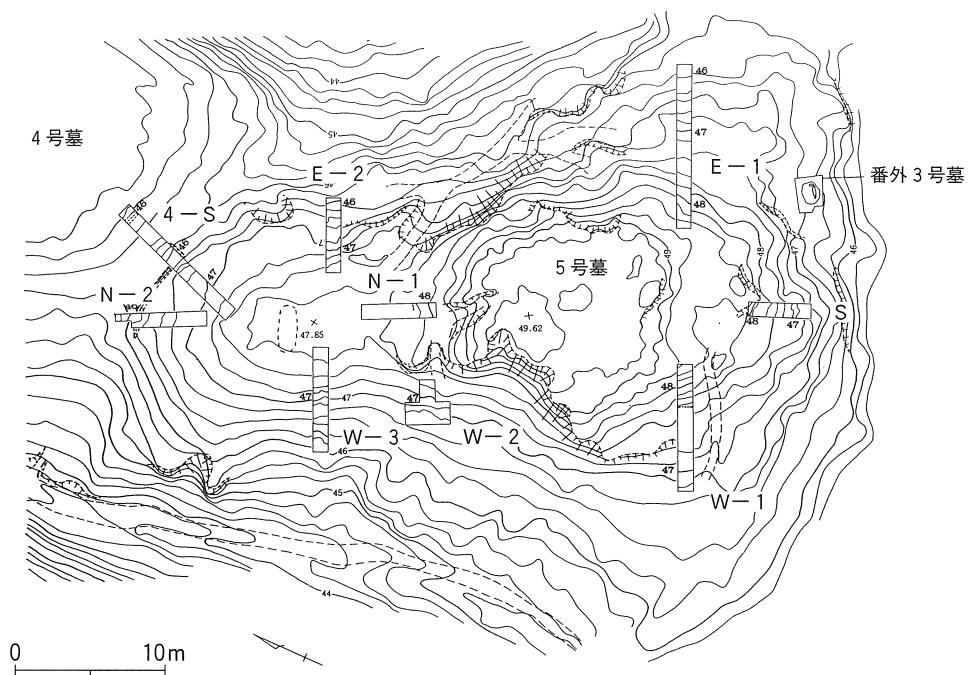
また、いずれのトレンチにおいても遺物等は全く確認できなかった。

b. 墳丘の復元

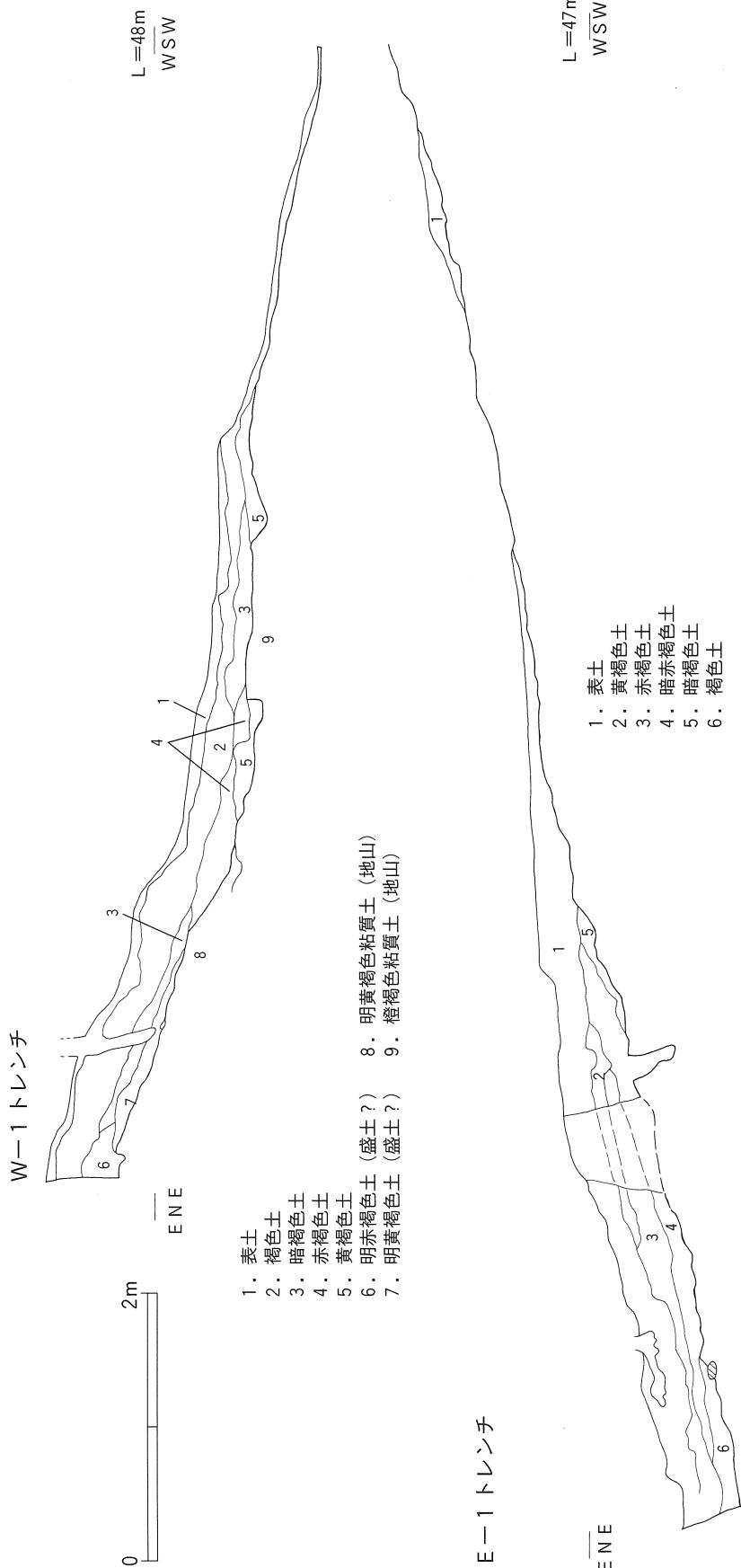
現段階での墳丘形状・規模の復元は推測の域を出ないが、W-1、S、N-1、E-1トレンチの傾斜変換点がある程度本来の裾部を反映しているとすると、南東ー北西方向に主軸をとる長方形墳墓である可能性が高い。このような仮定のもとに規模を復元すると次のようになる。



第16図 西谷5号墓墳丘測量図



第17図 西谷5号墓トレンチ実測図-1



第18図 西谷5号墓トレンチ実測図－2

墳丘規模

(南東－北西22m前後)

(南西－北東約17m)

頂部平坦面

(南東－北西10m以上)

(南西－北東約8m)

高さ

(2m前後)

墳丘は、地山の露出状況から見ても大部分が地山削り出しで造られているものと考えられ、盛土は墳丘上方や斜面表面に使用されたものと考えられる。

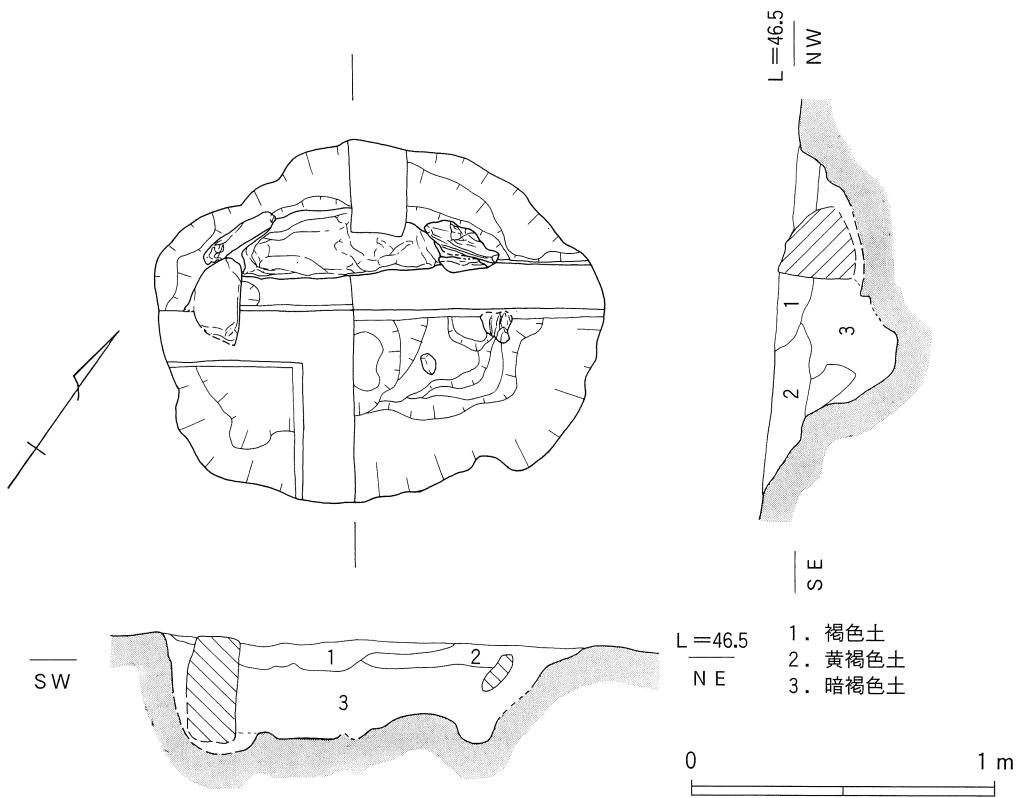
5号墓の墳形・規模については、全て推測に過ぎないが、墳丘の削平・地形の改変が著しいため、現段階での墳丘に関するこれ以上の言及は不可能と思われる。

4. 番外3号墓（第19図）

前述したように、番外3号墓は5号墓の南東に隣接する位置にある小規模な石棺墓である。堀り形の上面の標高は約46.7mとなっており、5号墓の墳裾と約1mの高低差がある。

調査前より石棺上面はすでに露出しており、蓋石も失われていた。

北東－南西方向に主軸を持ち、掘り形は南西－北東約1.4m、南東－北西約1.2mの橿円形状を呈する。堀り形の中は盗掘を受けており、



第19図 西谷番外3号墓実測図

東側と南東側の石材のみが残存していた。底部についても石材は確認されなかった。残存する石材は自然の河原石が使用されており、平坦な面を選んで内側にして組み合わせている。また、組み合わせのコーナーには板状の石材を外側からあてて隙間を塞いでいる。石棺の大きさは外法で長辺約1m以上、短辺45cm以上、内法で長辺65cm以上、短辺25cm以上を測る。深さは一部深くなっている部分を除いては約30cm程度となっている。堀り形の規模からみても、本来の大きさもこの数値から大幅に大きくなることはないと考えられ、極めて小規模な石棺であったことがわかる。遺物等は全く出土していない。

(4) 6号墓の調査

1. 墳丘の現状（第20図）

西谷6号墓は5号墓の南南東約100m、谷を挟んだ同一丘陵尾根上、標高約50mに立地する四隅突出型墳丘墓である。

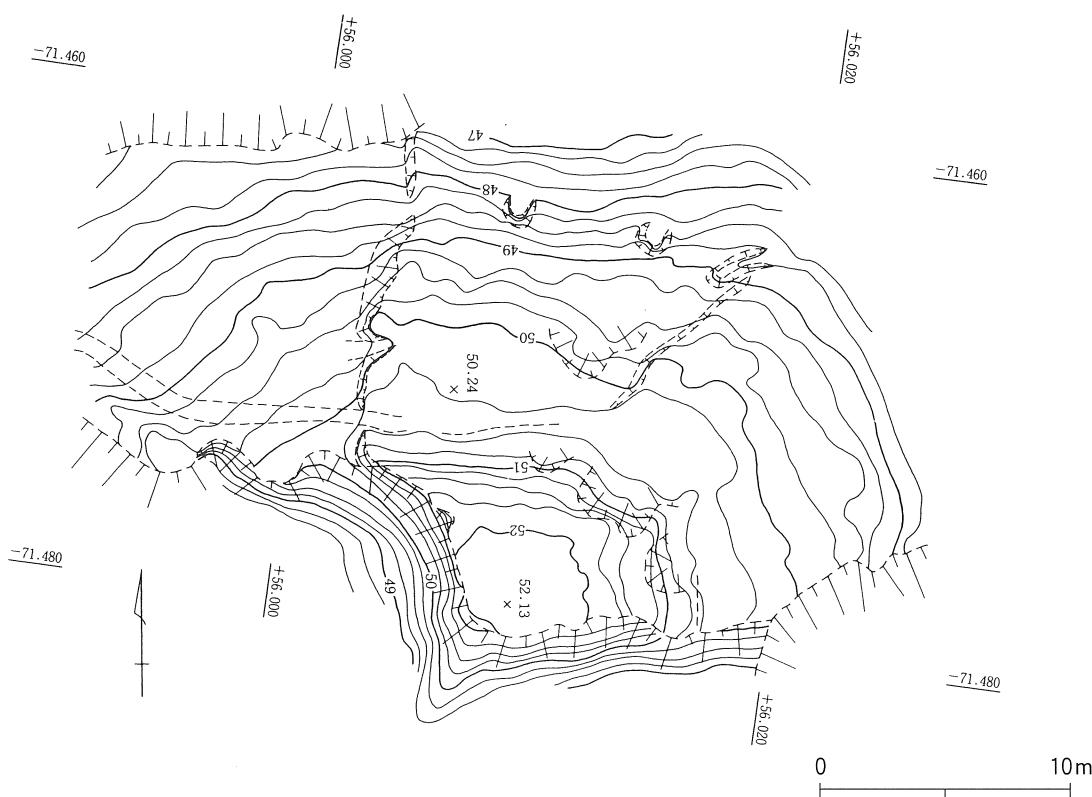
墳墓の南・西側は崖面となっており、南側崖面下には農道が走っている。また、北側一帯は畠となっている。墳丘南・西側は崖面からすでに崩壊しており、その他の部分についても北東側突出部部分を中心を開墾による地形の乱れが多く確認される。現在地表から確認される残丘の規模は東西約12m、南北約8m、高さ1.75mを測る。⁽⁴⁾墳丘の斜面や周囲、東側裾付近の断面露出部分には人頭大～拳大の石材が散在しているほか、北・東辺裾の一部ではボーリングによって配石が確認できる。

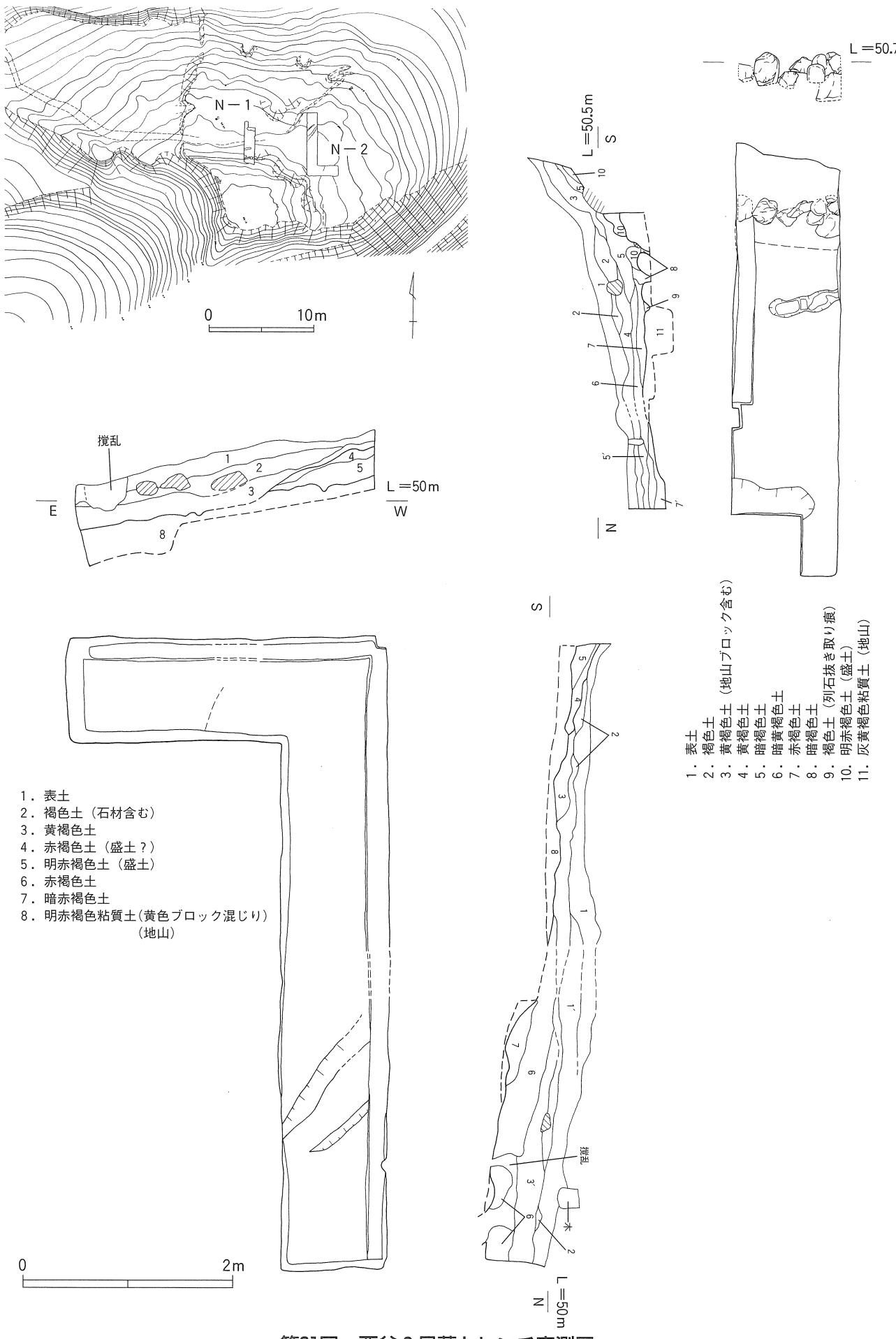
また、1980年の出雲考古学研究会の報告には、当時墳丘西裾の痕跡が崖面に残っており、ここから東裾崖面石材露出部分までの規模が17mとされている。現在ではこの痕跡は残存していない。その他、この時の調査時に南側崖面断面で土壙4基も確認されている。

2. トレンチの配置（第21図左上）

トレンチの設定は1m幅の長方形をもしくはL字形とし、長さについては地形に応じて決定した。トレンチの方向はみかけの墳丘主軸方向に対して平行もしくは直行して設定した。

トレンチの名称については北側裾部に長方形に設定したものをN-1トレンチ、北東側突出部付近にL字形に設定したものN-2トレンチとした。





第21図 西谷6号墓トレンチ実測図

3. 墳丘の規模と形態（第21図）

a. 配石構造

墳丘の配石は、遺存状態は悪いがN-1トレンチで貼石の一部と列石の痕跡が確認されている。石材の大部分は崩落や開墾によって失われており、残



第22図 西谷6号墓採集遺物実測図

存する貼石は、現状での墳丘裾から20~70cm上の範囲でわずかに確認されるのみである。貼石の石材は20~30cm大の河原石であった。裾部の配石については、石材は残存していなかったが、N-1トレンチで現状の墳裾より約50cm外方に列石の抜き取り痕と思われる浅い溝状の落ち込みが確認された。本来は貼石下端より40~50cm幅の平坦面敷石が廻り、その外周にさらに列石が廻っていたものと推定される。確認された石列痕の外方は地山のレベルに80cm以上変化ないが、2列目の石列痕は確認されない。このことから敷石・列石は1列のみの可能性が高い。

b. 突出部の形態

N-2トレンチにおいて北東側突出部の痕跡を確認した。このトレンチも遺存状態があまり良くなく、本来の配石は全く残っていなかった。N-2トレンチの南北ラインでは、突出部裾付近にあたると思われる部分に幅40~60cmの溝状落ち込みが確認された。この溝状落ち込みは墳丘築造時の区画、もしくは配石を固定するためのものと推定され、本来の突出部裾のラインを反映しているものと考えられる。また、N-2トレンチの東西ラインでは、墳丘の盛土及び傾斜の変換点が確認される。本来の墳丘からはある程度削平された状態と考えられるが、突出部基部幅の下限がこれにより把握できる。突出部の形状をN-1、2トレンチ、北側崖面露出石材位置から図上復元すると、基部幅4m以上、長さは北辺と東辺の延長線交点から3m程度はあったものと思われる。

c. 墳丘の復元

今回の調査の結果と南側崖面石材露出状況、1980年の出雲考古学研究会の報告から、ある程度墳丘規模を推測することができる。1列の敷石・列石の幅を50cmとしてその外周列石までを墳丘規模とすると、西谷6号墓の墳丘の復元規模は以下のようになる。

方形部規模	東西約17m、南北8m以上
突出部含む規模	東西20m以上、南北10m以上
頂部平坦面	東西6m前後、南北4m以上
高さ	約2m

墳丘は地山整形後盛土によって築かれており、各トレンチでも墳丘盛土の土層が確認される。南側崖面部分の断面では、頂部から約30~40cmまでが盛土であることも確認できる。

4. 採集遺物（第22図）

今回の調査においては出土した遺物は全て細片で風化著しく、図化可能な個体は皆無であった。第22図は過去に墳丘南側崖面より採集された資料で、今回の報告にあわせて実測を行なった。資料は壺口縁部片で、器壁5mm以下の薄手のもので、端部付近でやや外反する二重口縁になっている。複合部口縁稜は短く、水平方向に突出している。胎土は細かい砂粒を多く含み、色調は橙褐色を呈する。

(5) 7号墓の調査

1. 墳丘の現状（第23図）

西谷7号墓は1～6号墓が立地する丘陵と谷を挟んで東側の丘陵最高所、標高約49mに立地する前方後方形もしくは長方形墳墓である。

墳墓周辺の現況は山林であり、周辺には数本の山道が走っている。中でも墳丘南東側に北北東－南南西方向に走る道は地形を大幅に掘削して造られている。地表からは西北西－東南東方向に主軸を持つ西北西－東南東22.5m、北北東－南南西16m、高さ約2mの長方形墳墓、もしくはそれに幅約13m、長さ約10m程度の前方部が付く全長約32.5mの前方後方形墳墓として観察できる。⁽⁴⁾また、墳丘北東側には広い平坦面がひろがっている。

2. トレンチの配置（第24図）

トレンチの設定は1m幅の長方形もしくはL字形を基本とし、長さについては地形に応じて決定した。ただし、検出した遺構が1m幅では不十分と判断したトレンチについては状況に応じて拡張を行なった。また、トレンチの方向は、見かけの墳丘主軸方向に対して平行もしくは直行して設定した。

トレンチの名称については、墳頂部に設定したものをC-1トレンチ、東南東側平坦面（前方部平坦面）に設定したものをC-2トレンチ、西北西側裾部に設定したものをWトレンチ、北北東側裾部に設定したものを西からNトレンチ、南南西側裾部に設定したものをSトレンチとし、裾部で複数トレンチを設定したN、Sトレンチについては西から順に通し番号を付した。

3. 墳丘の形態と規模（第24図～第25図）

a. 墳丘各部の調査

現状での墳丘裾が最も明瞭に確認できたのは、西北西側裾のWトレンチと東北東側裾のN-1トレンチである。これらのトレンチでは、墳丘盛土を伴う裾部の立ち上がりが確認される。墳裾の標高はWトレンチで49.5m、N-1トレンチで標高49mを測る。Wトレンチ墳裾西側には深さ約20cm、幅2.3mの溝状の落ち込みが、N-1トレンチの墳裾部には後述する番外5号墓が確認されている。その他に盛土が確認されるトレンチにはSトレンチとC-2トレンチがある。S-1トレンチでは明瞭ではないが、標高50mと49.2mで傾斜の変換が確認される。上の傾斜変換点まで盛土と思われる土層が確認される。C-2トレンチでは、東西ライン西側で薄い盛土土層が確認される。戦後の開墾跡かと思われる溝によって傾斜の変換点付近は掘削されているが、標高50mの位置に傾斜変換点があったものと考えられる。

その他、墳丘の形状に直接関連するかは不明だが、N-2、S-2トレンチでもそれぞれ標高48.2mと48.8mの位置で傾斜の変換が確認される。特にN-2トレンチの傾斜変換は明瞭で急角度である。

b. 墳丘の復元

各トレンチの状況から墳丘形状・規模の復元を試みるが、明瞭に墳丘裾として確認できた傾斜変換点は少なく、仮定のものとの復元となる。

墳形については、各部の傾斜変換点の位置からは前方後方形としての痕跡は確認できなかった。N-2トレンチで確認された急な落ち込みの性格など不明な問題はあるが、現状ではC-1トレンチを中心とする長方墳として復元を行なう。



第23図 西谷 7号墓墳丘測量図

盛土残存部付近の傾斜変換点を本来の墳裾に近いものだと仮定すると、西北西－東南東約22m、北北東－南南西17.5m、高さ約1～2mの長方墳と推定される。

墳丘は北北東側が高く意識されて造られているようである。

4. 主体部（第26図）

墳頂部に設定したC-1トレーニチにおいて主体部と思われる土壙2基を検出した。中心となる埋葬主体と考えられるトレーニチ中央部の土壙を便宜上第1主体、その西側の土壙を第2主体と名付けることとする。

第1主体は、頂部中央部に掘り込まれた、北北東－南南西方向に主軸を持つ長さ4.1m、幅1.4mの橢円形状の土壙である。深さはサブトレーニチで確認した範囲では約30cmである。

埋土上面からは土器が散乱した状態で確認されている。また、土壙埋土上のはば中央部には30cm大の河原石が確認された。四隅突出型墳丘墓である西谷3号墓などに見られる主体部上石柱との関連性は不明であるが、それに類似した出土状況である。墓壙の周囲には落ち込みが土層から確認できるが、これは墓壙掘削前に埋められているようである。おそらく墓壙周囲を1周廻っていたものと考えられるが、その正確な形状や性格は今回の調査では把握しきれなかった。

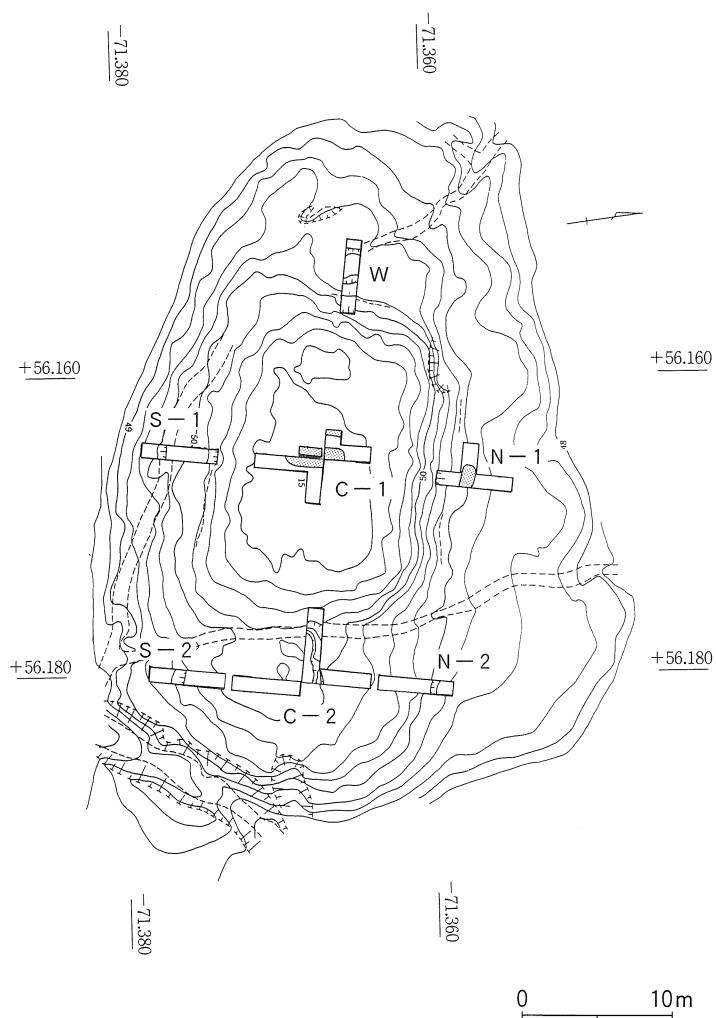
5. 出土遺物（第27図）

遺物は裾部各トレーニチで土器細片が、C-1トレーニチ第1主体上面から土師器片が出土している。裾部トレーニチ出土土器はいずれも細片で風化著しい。器種等も不明である。第1主体上面出土遺物には、甕、鼓形器台がある。図化しなかつた土器の中には甕・壺体片があるが、厚さ8mm程度の厚手のものと2～4mm程度の薄手のものがある。

1～2は甕である。1は複合口縁の口縁部片である。厚さ約9mmの厚手のもので、口縁端部には明瞭な平坦面を持ち、外方にやや肥厚する。風化しているが、口縁立ち上がり部分には内外面ナデが確認される。口縁幅等一定でなく、ゆがみのある個体である。口径は25cm前後と推定される。

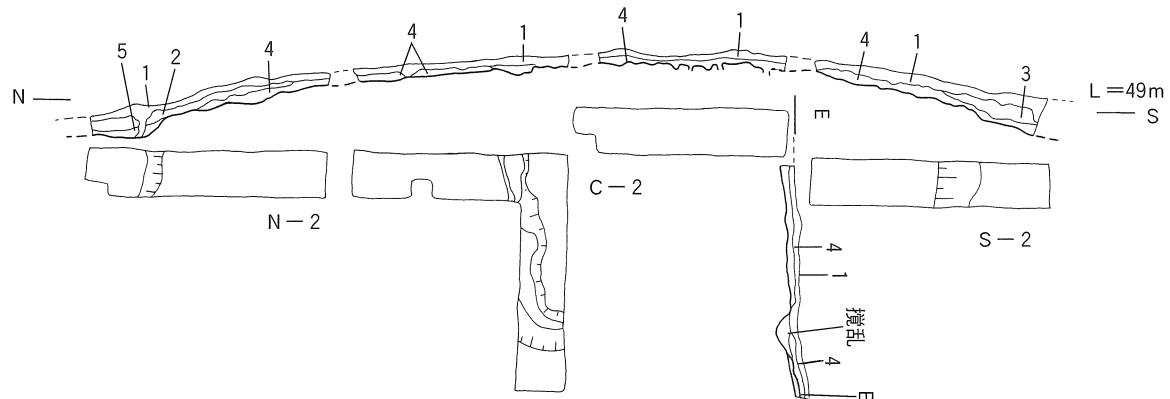
2は頸部片である。出土状況等から1と同一個体である可能性が高い。頸部内面にはミガキが確認される。胎土は石英・長石・雲母を含み、にぶい黄橙色を呈する。

3は鼓形器台筒部から脚部にかけての破片である。筒部は短く、脚部は偏平に広がる。脚端部付近

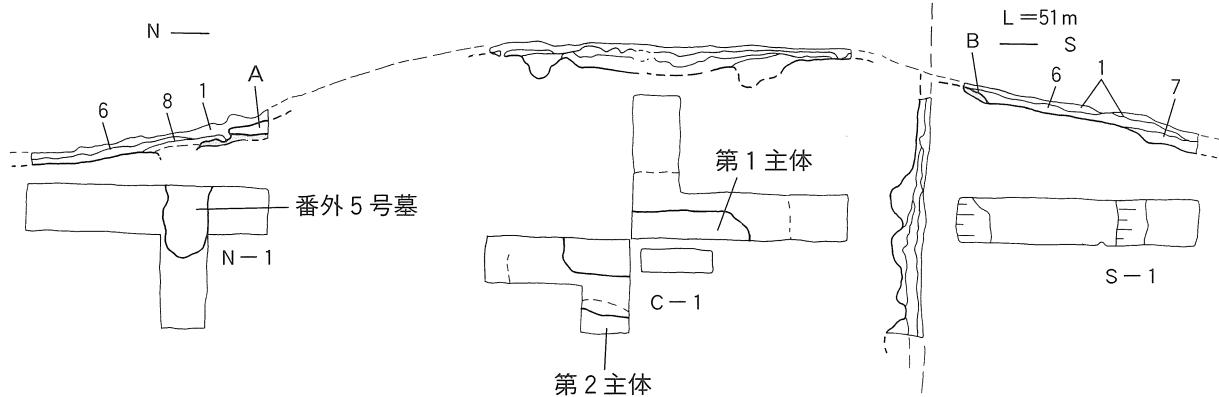


第24図 西谷7号墓トレーニチ配置図

で大きく外反し、端部平坦面が外方に面する。外面にはナデが、脚部内面にはケズリが確認される。筒部径9.8cm、脚部径20.5cmを測る。胎土は白色微砂粒を含み、赤橙色を呈する。



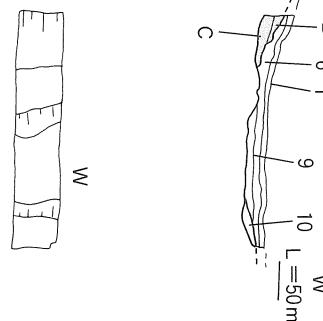
※ C-1 トレンチ土層については第26図参照



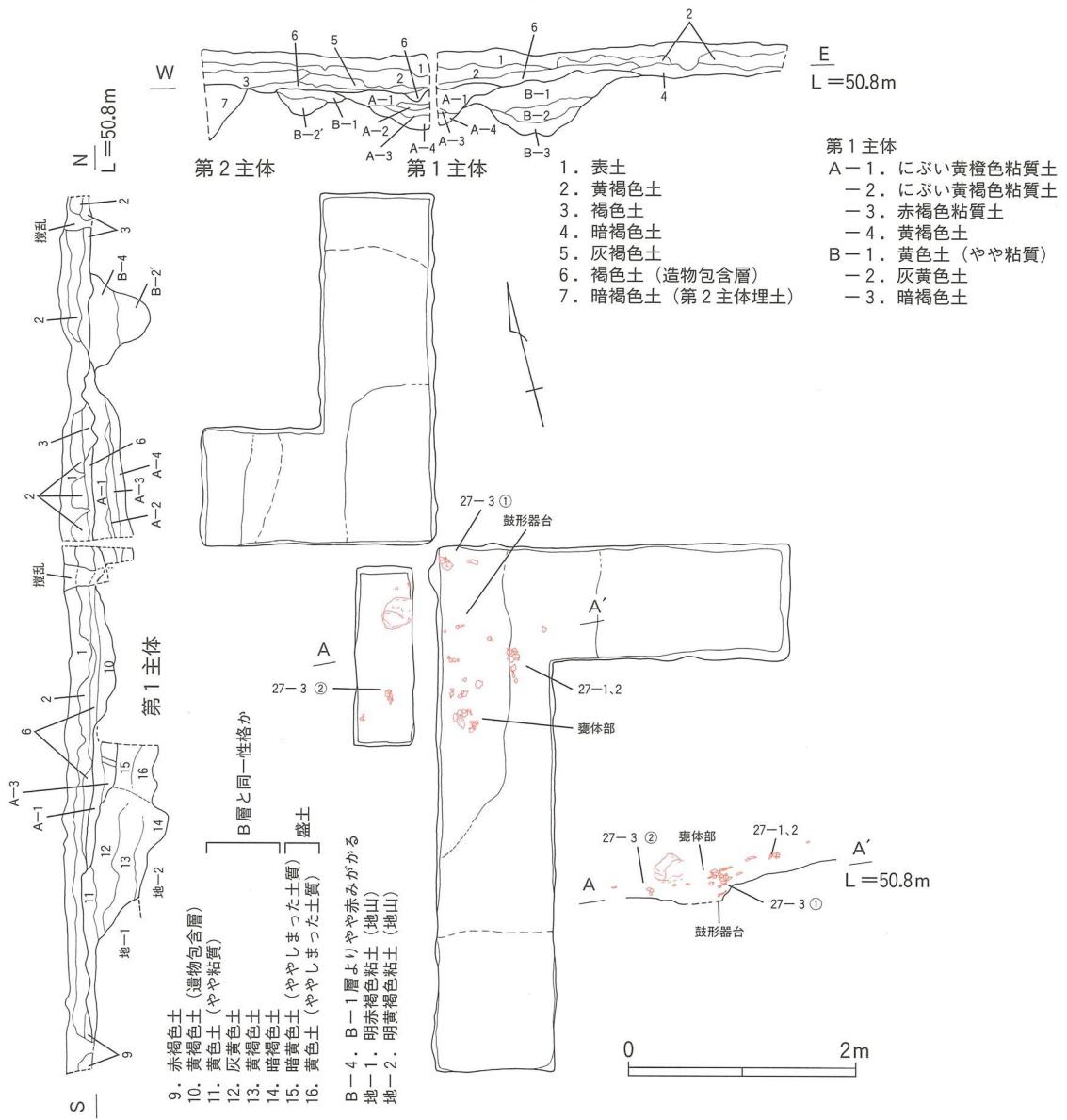
- 1. 表土
- 2. 黄褐色土
- 3. 明褐色土
- 4. 赤褐色～褐色土
- 5. 明赤褐色土
- 6. 褐色土
- 7. 黄褐色土
- 8. 赤褐色土
- 9. 赤褐色土（溝状落ち込み埋土）
- 10. 暗赤褐色土

- A. 灰褐色土（盛土？）
- B. 黄褐色土（ややしまった土・盛土）
- C. 明赤褐色土（盛土）

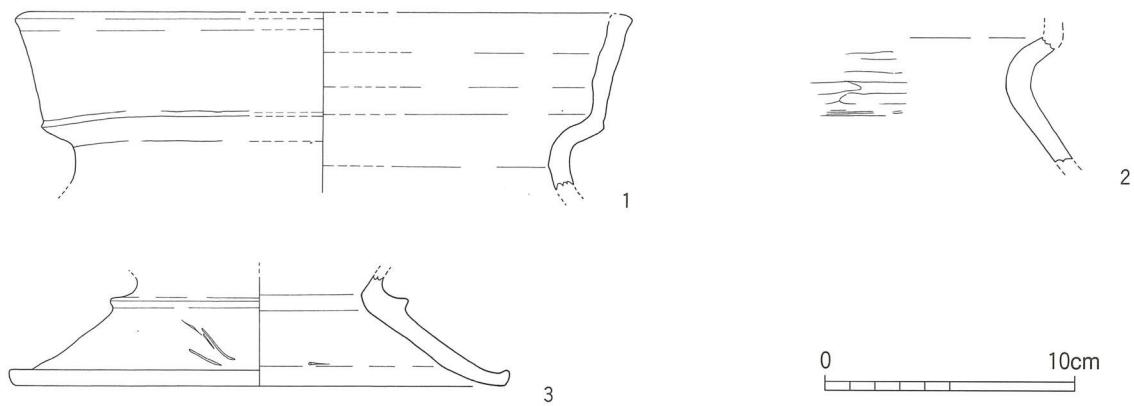
0 8 m



第25図 西谷7号墓トレンチ実測図-1 (墳丘)



第26図 西谷7号墓トレンチ実測図-2 (墳頂主体部)

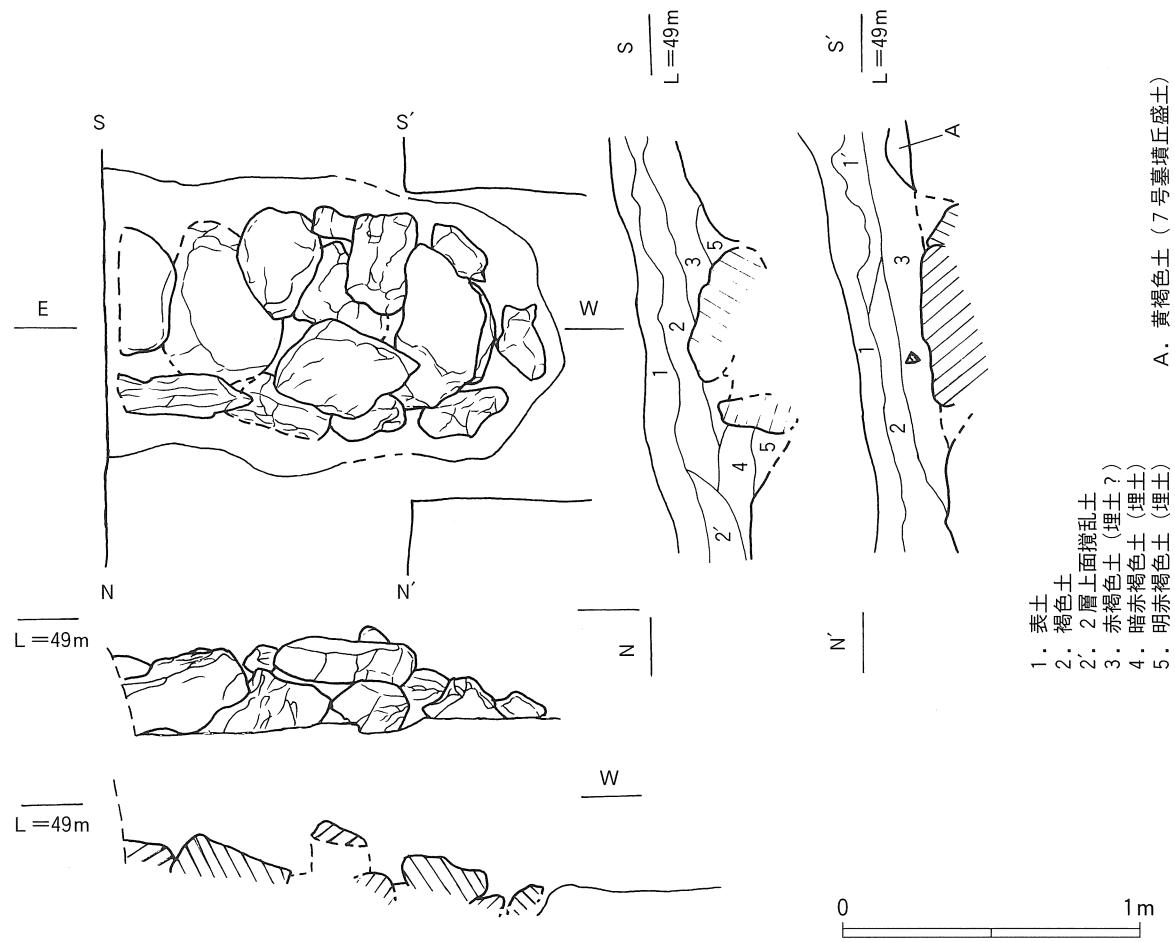


第27図 西谷7号墓主体部上出土遺物実測図

6. 番外 5 号墓 (第28図)

番外 5 号墓は西谷 7 号墓の北北東裾に造られた石棺墓である。7 号墓調査時に N-1 トレンチで偶然発見されたもので、7 号墓墳丘盛土を一部切って掘り込まれている。その一部は未検出であり、棺内は調査していない。

自然石を用いた組合せ式の箱式石棺墓で、東南東-西北西方向に主軸をとる。掘り形は長辺 1.5m 以上、短辺 1 m、石棺は外法で長辺 1.4m 以上、短辺 80cm を測る。側壁は短辺 1 個・長辺 4 個以上の石材を使用している。蓋石は 4 個以上の石材を側壁にかけ、その隙間にさらに小さめの石材を被せていく。遺物等は確認されていない。



第28図 西谷番外 5 号墓実測図

(6) 17号墓の調査

1. 墳丘の現状（第29図）

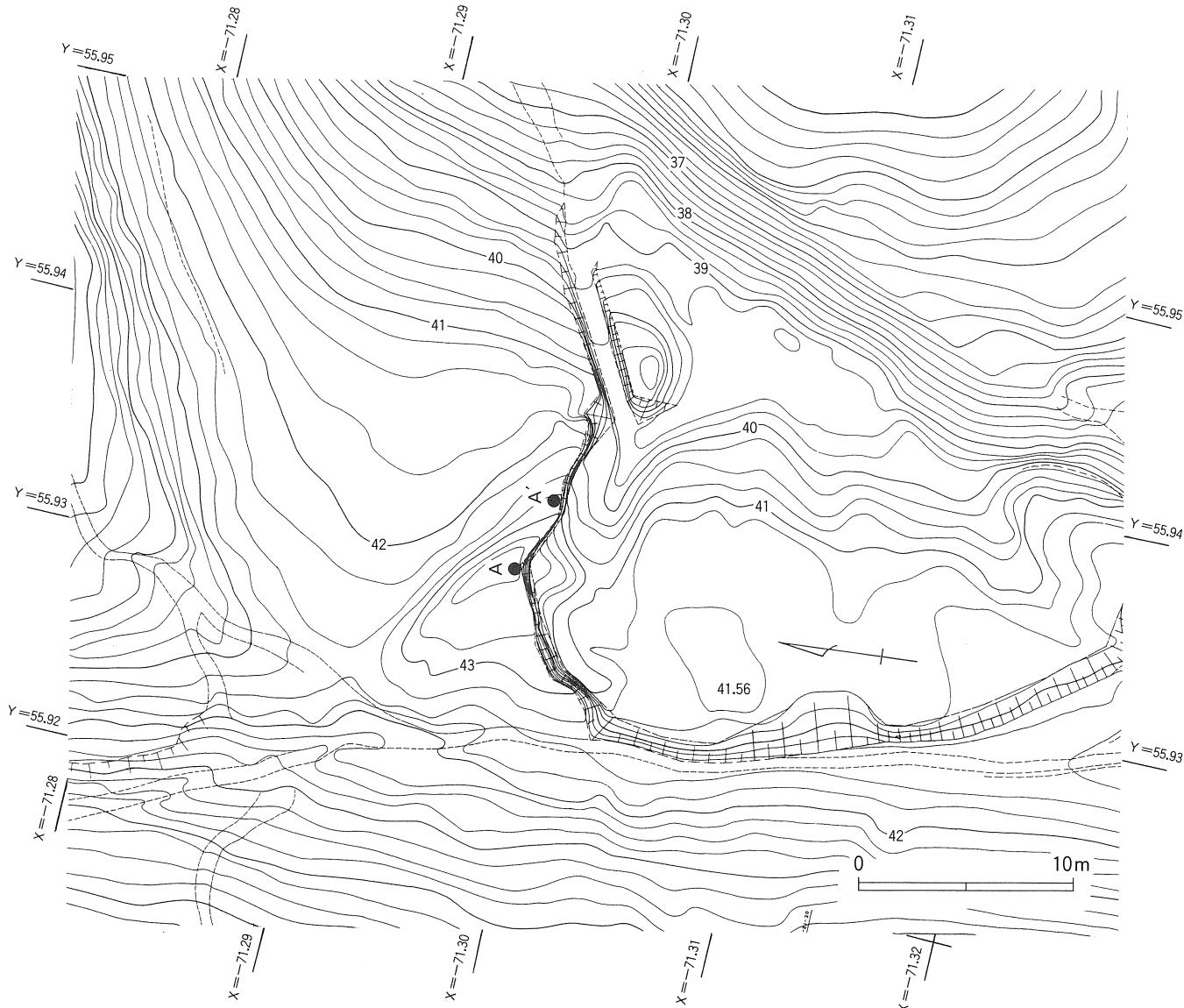
西谷17号墓は、西谷墳墓群の西側丘陵、1～6号墓が築造される丘陵の尾根上標高約43mにあって、3号墓南西側突出部の南方に隣接して築造された墳丘墓である。

墳丘周辺の現状は山林であるが、山道や陶土採取土による地形の改変が著しい。墳丘の南側、西側は原形をとどめておらず、特に南側については陶土採土による垂直に近い崖面となっている。北東側は等高線の乱れは少ないが、本来の墳形をどれほど残すか定かでない。現状の地表からの観察では、1辺5m程度、高さ約1mの三角形状残丘として確認される。

2. 崩落面土層堆積状況（第29図、第31図）

17号墓南側崖面では、その土層断面が明瞭に観察できる。崖面崩落の恐れもあるため、今回この断面調査を実施した。断面ラインは第29図のA・A'の軸に設定した。

墳丘部分の土層はくさり礫層地山のみが確認され、盛土等は全く確認できなかった。頂部付近も表土直下が地山となっており、本来の墳頂部もすでに削平されているものと考えられる。標高42.8m付



第29図 西谷17号墓墳丘測量図（島根大学考古学研究室原図・加筆）

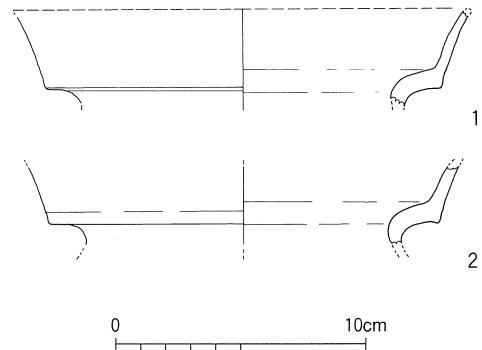
近に1m前後の平坦面が確認され、この部分が墳丘裾と推定される。現状の推定では、墳丘は8m以上、高さ70cm以上の円形もしくは方形でを呈するものであったと思われる。

また、この裾部には土壙1基が確認された。土壙は幅約70cm、深さ約40cmを測る。埋土内では、土器がすでに露出した上体で確認された。露出していた土器については、すでに崖面下に崩落している破片もあり、放置しておくと近い将来失われてしまう恐れがあったため、図面を作成して取り上げを行なった。

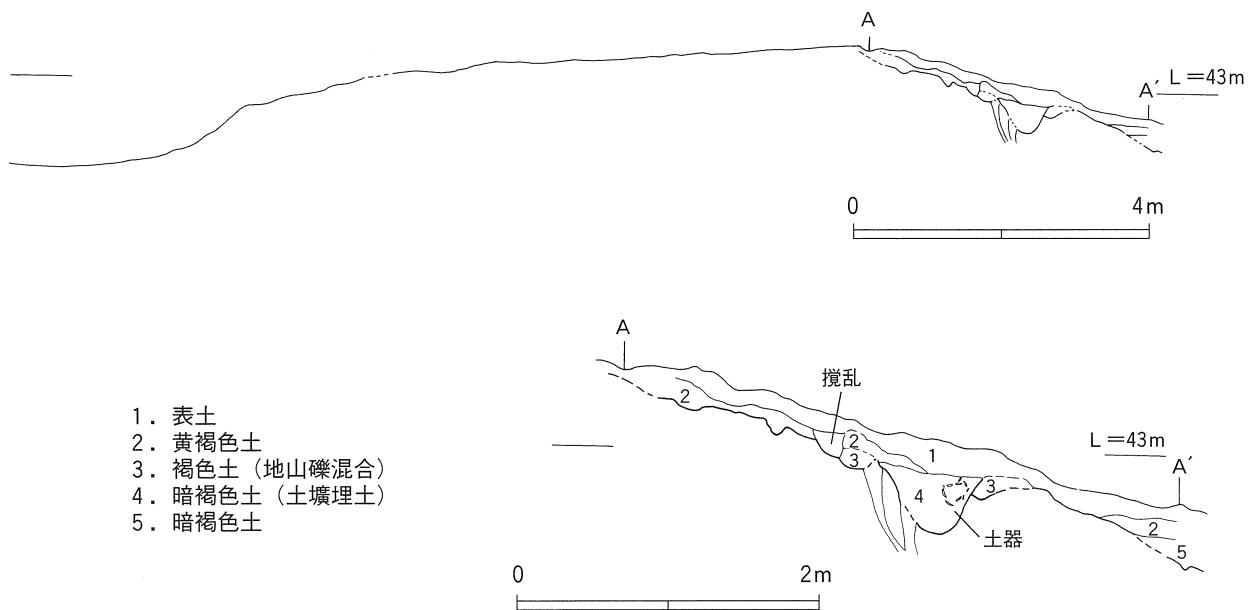
3. 出土遺物（第30図）

出土遺物は裾部土壙内より確認された弥生土器壺のみである。全体に風化が著しく、細片と化していたが、口縁の一部は図化可能であった。

1～2は複合口縁の壺口縁部片である。出土状況から同一個体と考えられる。厚さ4～7mm程度の個体である。口縁立ち上がり部の稜は、短いがやや下垂ぎみに伸びている。調整等は風化著しいため観察できなかった。口縁復元径は約18cmである。体部については図化できる破片がなく、図上復元等もできなかったが、出土時の状態から体部径19cm前後の個体であったと推定できる。出土した土器片の胎土は、いずれも微砂粒を含み、橙色の色調を呈する。



第30図 西谷17号墓土壙内出土遺物実測図

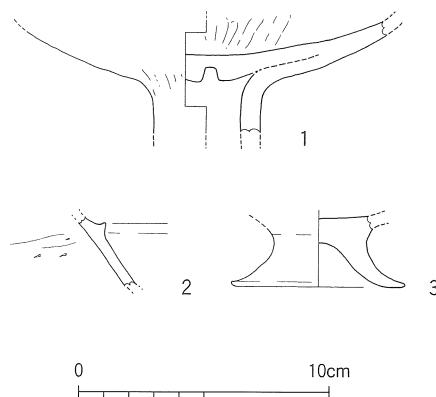


第31図 西谷17号墓崩落面土層堆積状況実測図

第4章 9号墓採集遺物

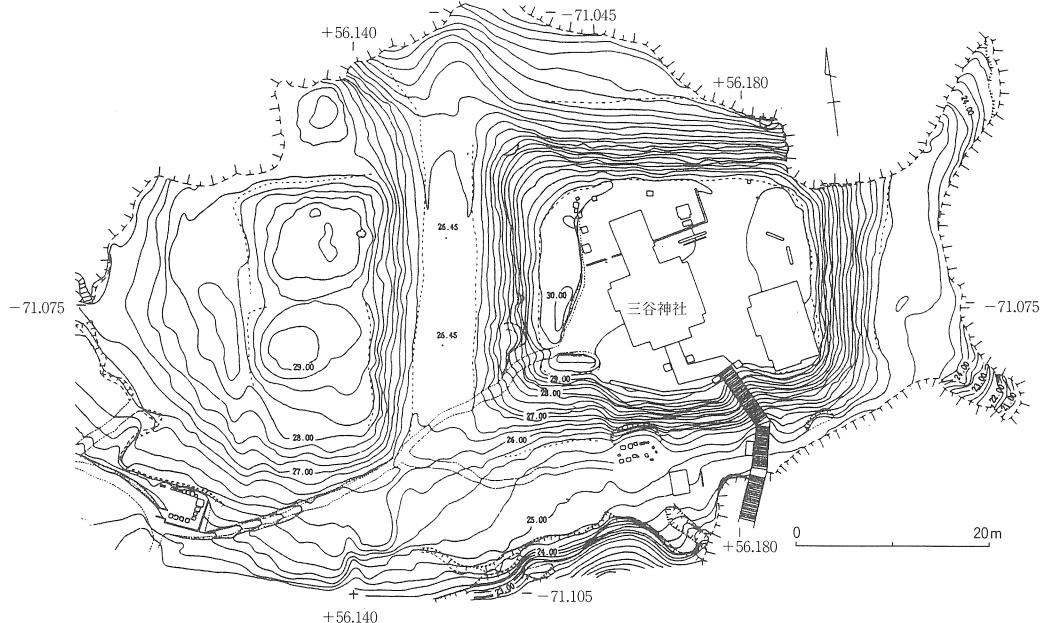
前章で紹介してきた資料は今回の調査対象とした墳墓のもののみであるが、その他にも、出雲市教育委員会では西谷墳墓群の遺物をいくつか保管している。ここではその内の四隅突出型墳丘墓である西谷9号墓採集遺物を紹介する。

第32図はいずれも9号墓墳頂部から採集されたもので、1、3はすでに1993年に出雲市教育委員会で報告している資料、⁽⁵⁾2はこれらの遺物と同時期に採集されたものであるが、今回新たに紹介する資料である。



1は高環の環・脚接合部分である。環底部外面に径6mmの刺突痕がある。内面にはミガキ調整が施される。接合痕より、接合法は円盤充填によるものであることがわかる。脚基部径4.5cmを測る。2は鼓形器台の脚部である。外面ナデ、内面ケズリが確認される。3は低脚環脚部である。いずれの個体も微砂粒を多く含み、にぶい黄橙色の色調を呈する。

第32図 西谷9号墓採集遺物実測図



第5章 まとめ

今回の発掘調査の結果、西谷墳墓群の四隅突出型墳丘墓を中心とする主要墳墓についての概略を把握することができた。過去の調査と今回の調査結果の概略をまとめたものが表1である。

西谷墳墓群では、弥生時代後期後半、草田⁽⁶⁾3期の時期に3号墓や4号墓のような巨大な四隅突出型墳丘墓が突如出現する。これらに若干後出して2号墓が、弥生時代終末期にあたる草田5～6期には9号墓が造営されており、突出部を含めた長辺規模40mを超える巨大な四隅突出型墳丘墓が連続して築造されていたと考えられる。これらの墳墓の規模は、他の遺跡で発見されている四隅突出型墳丘墓と比較しても傑出したものがあり、いずれも最大級のものである。これらの墳墓に匹敵する規模の四隅突出型墳丘墓は、全国的に見ても島根県安来市塩津山10号墓（方形部34×26m）、福井県南春日山1号墓（方形部40×29m）、鳥取県西桂見弥生墳丘墓（方形部40m以上・方形墓の可能性あり）の3基が挙げられるのみである。西谷丘陵の大形四隅突出型墳丘墓のうち2・4号墓では吉備の特殊土器⁽³⁾⁽⁷⁾が、3号墓では吉備の特殊土器と北陸系の土器が出土しており、こうした地域との交流が西谷墳墓群における巨大墳墓造営の背景にあったものと考えられよう。また、西谷丘陵には中小規模の四隅突出型墳丘墓も草田3期前後に1号墓が、草田5期に6号墓が造営されている。これら西谷墳墓群の四隅突出型墳丘墓については巻末に墳丘復元想定図（第34図～第39図）を付した。

四隅突出型墳丘墓をはじめとする弥生墳丘墓に続く時代のものと考えられるのが、西谷7号墓などの墳丘に配石を伴わない中小古墳群である。大形の墳墓はこの時期には確認されない。現在時期が判明しているものとしては、今回調査を行なった7号墓、平成3～4年に調査を行なった15・16号墓⁽⁵⁾がある。7号墓は古墳時代前期にあたる時期の造営と考えられ、その後古墳時代中期後半頃に15・16号墓が造営されている。これらの古墳はいずれも四隅突出型墳丘墓が造営された丘陵とは異なる丘陵に築かれたもので、時期による墓域の移動が認められる。

弥生時代後期と古墳時代では墳墓の規模・内容に格差が認められ、この時代移行期における社会背景の解明が出雲平野の考古学研究の最重要課題の一つである。

参考文献

- (1)出雲考古学研究会『古代の出雲を考える2－西谷墳墓群－』 1980年
- (2)池田満雄「下来原西谷丘陵出土土器」『出雲市の文化財』第1集 出雲市教育委員会 1958年
- (3)渡部貞幸他「西谷墳墓群の調査（I）」「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」 島根大学法文学部考古学研究室 1992年
- (4)『西谷墳墓群測量調査報告書』 出雲市教育委員会 1998年
- (5)『簸川南地区広域農道整備事業に伴う西谷15・16号墓発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1993年
- (6)『講部地区県営圃場整備事業発掘調査報告書』 5 南講部草田遺跡 鹿島町教育委員会 1992年

(7) 渡辺貞幸「弥生墳丘墓における墓上の祭儀－西谷3号墓の調査から－」『島根考古学会誌』第10集
島根考古学会 1993年

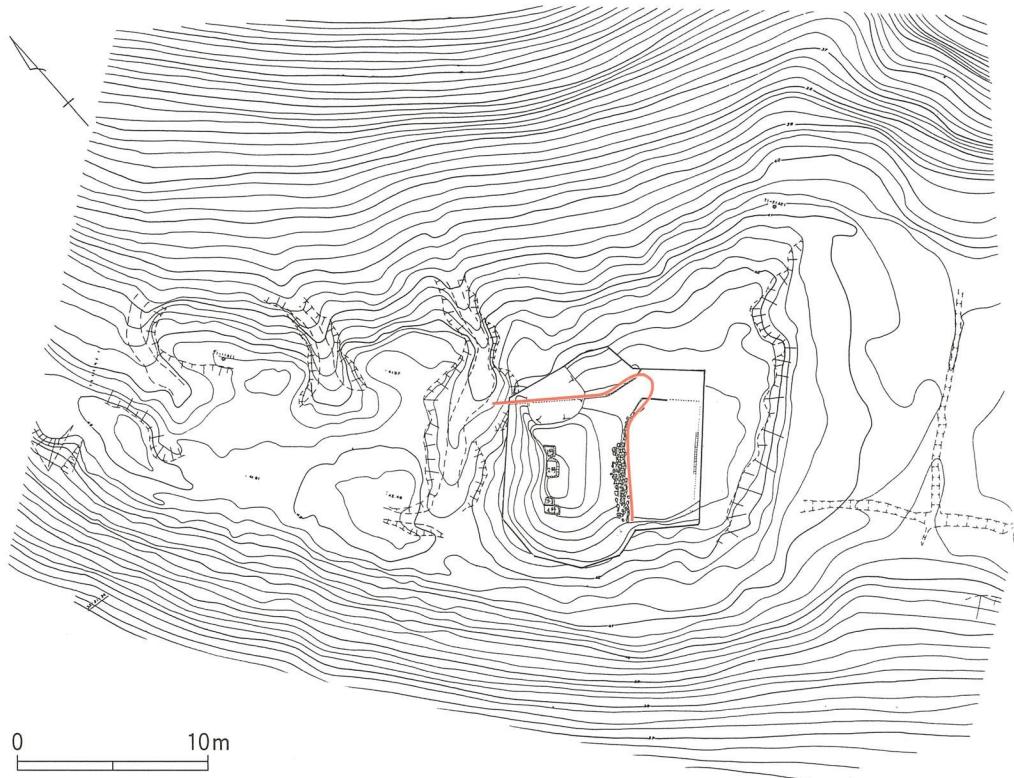
(8) 門脇俊彦「また出た発生期の古墳」『季刊文化財』17号 島根県文化財愛護教会 1972年

西谷墳墓群一覧

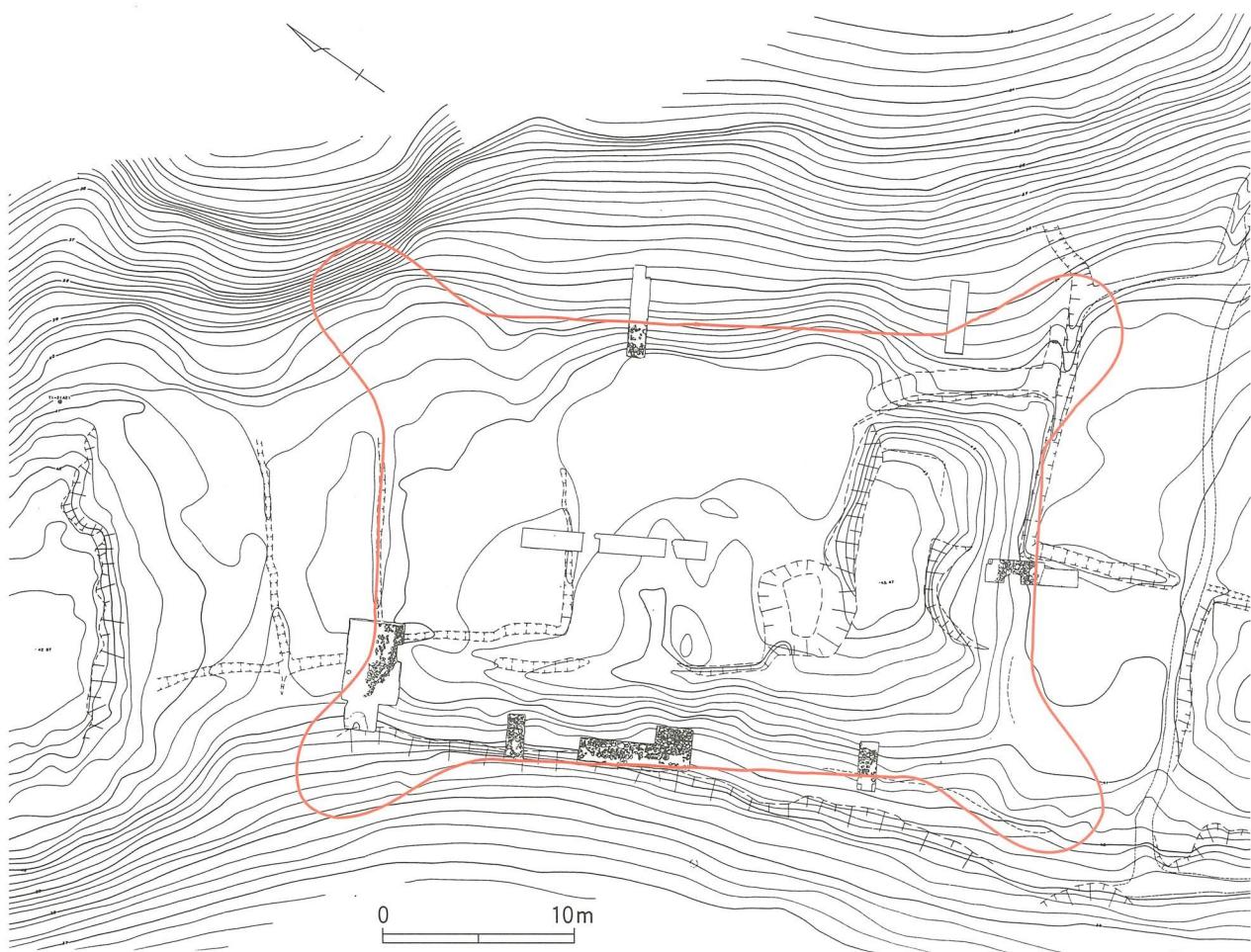
単位：m

名 称	墳 形	墳丘規模(一辺×一辺×高)	主 体 部	遺 物	時 期・備 考	参 考 文 献
☆ 1号墓	四隅突出	8以上×5以上×1.7	土壙4	弥生土器	草田3?・半壊	④⑧
☆ 2号墓	四隅突出	24×35×3.5	土壙2以上	弥生土器	草田4・半壊	①
☆ 3号墓	四隅突出	40×30×4.5	土壙8以上	弥生土器 鉄劍 玉類	草田3	③⑦
☆ 4号墓	四隅突出	34×27×4		弥生土器	草田3	①②
5号墓	方形?	17?×20以上?×2	裾部土壙1?			①④
☆ 6号墓	四隅突出	17×8以上×2	土壙4以上	弥生土器	草田5・半壊	①④
7号墓	方形?	24以上×19×2		土師器	草田7	①④
8号墓	方形?	31?×31?×2以上		土器細片	消滅	①
☆ 9号墓	四隅突出	42×35×4.5		弥生土器	草田5~6	③⑤
10号墓	方形	10×9×1.25				①④
11号墓	円形	径19×2.5				①④
12号墓	方形	10×10×1.25				①④
13号墓	方形	10×10×1.5				①④
14号墓	円形?	径12?×1.5				①④
15号墓	方形	15×15×0.9	土壙1	須恵器 土師器 刀子	消滅	⑤
16号墓	円形	径11×1	箱式石棺1	鉄劍 鉄斧 鉄製鋸先	消滅	⑤
17号墓	方形?	高1		弥生土器		③④
18号墓	方形	7×7×0.5				③④
19号墓	方形	14×12×1				③④
20号墓	方形	13×10×1				③④
21号墓	方形	10×8×1				④
22号墓	方形	13×10×1.5				④
23号墓	方形	9×9?×0.75				④
24号墓	方形	12.5×12.5×1.5				④
25号墓	円形?	径25×2.5				④
26号墓	方形	17×13×2.5				④
27号墓	方形	8×8×0.5				
番外1号墓	無		土壙1	弥生土器	草田4~6	①
番外2号墓	無		箱式石棺1			①
番外3号墓	無		箱式石棺1			①
番外4号墓	無		土壙1		消滅	⑤
番外5号墓	無		箱式石棺1			

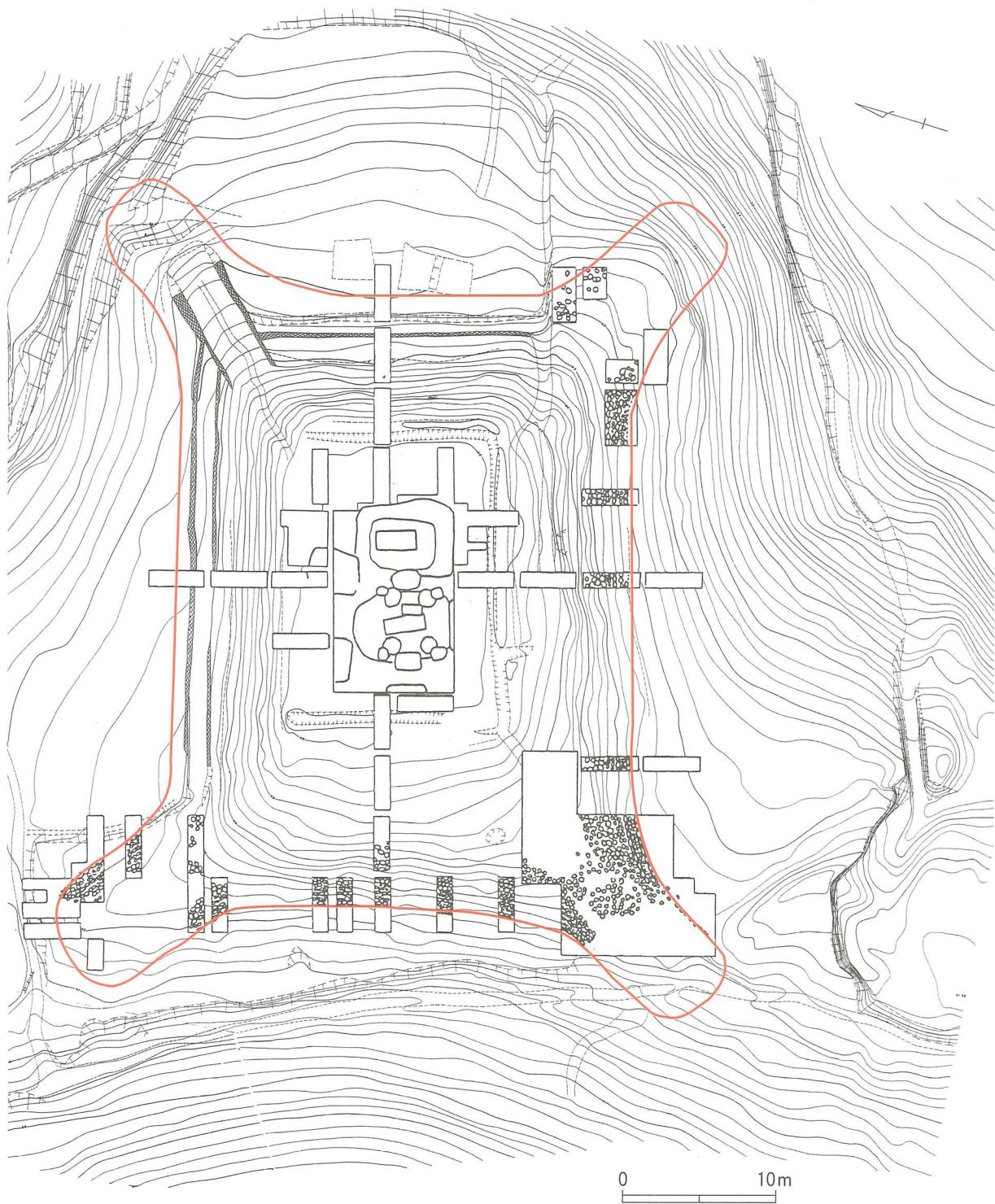
*四隅突出型墳丘墓の規模は突出部を含まない数値



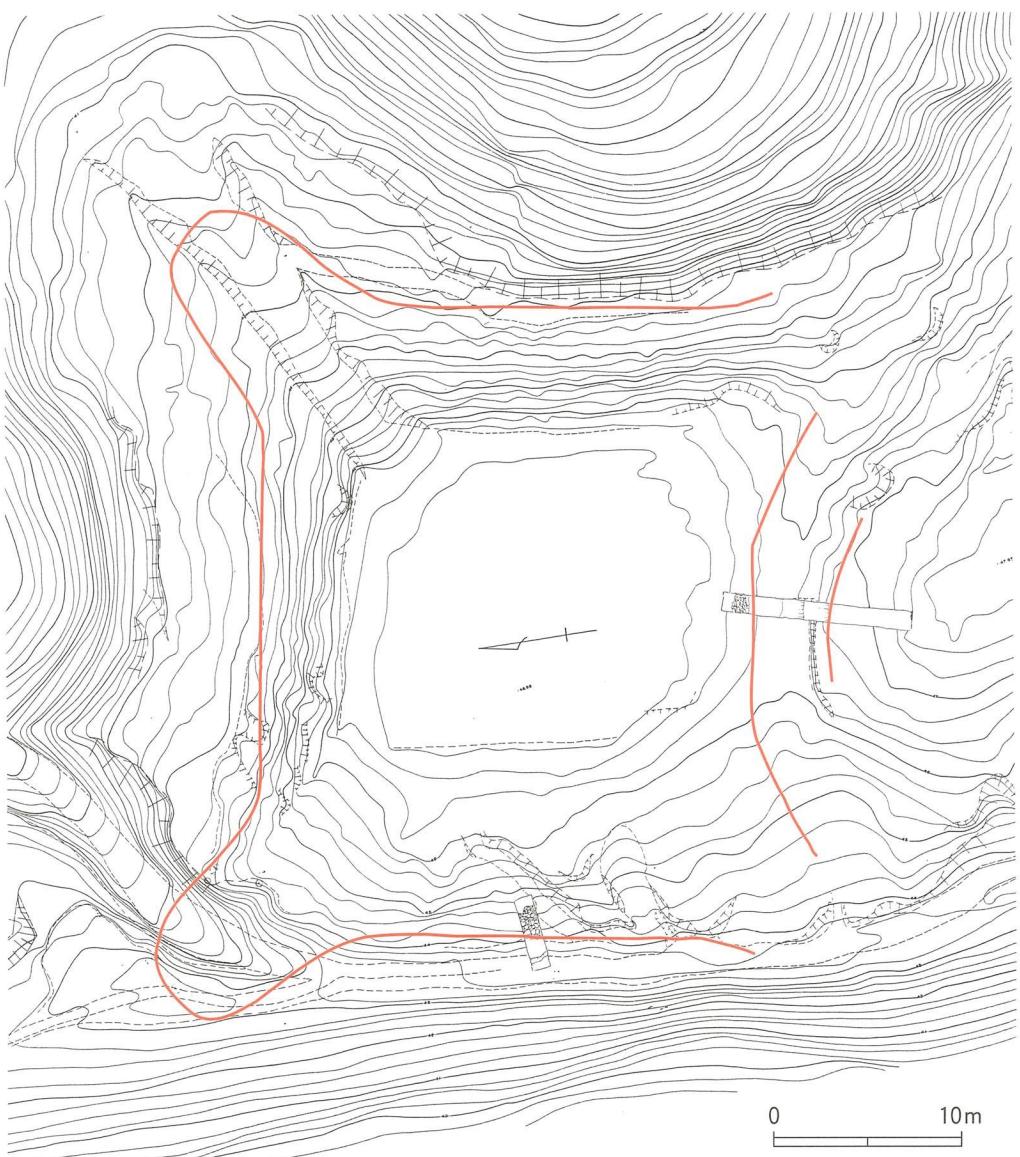
第34図 西谷 1号墓墳丘復元図（文献4・8より作図）



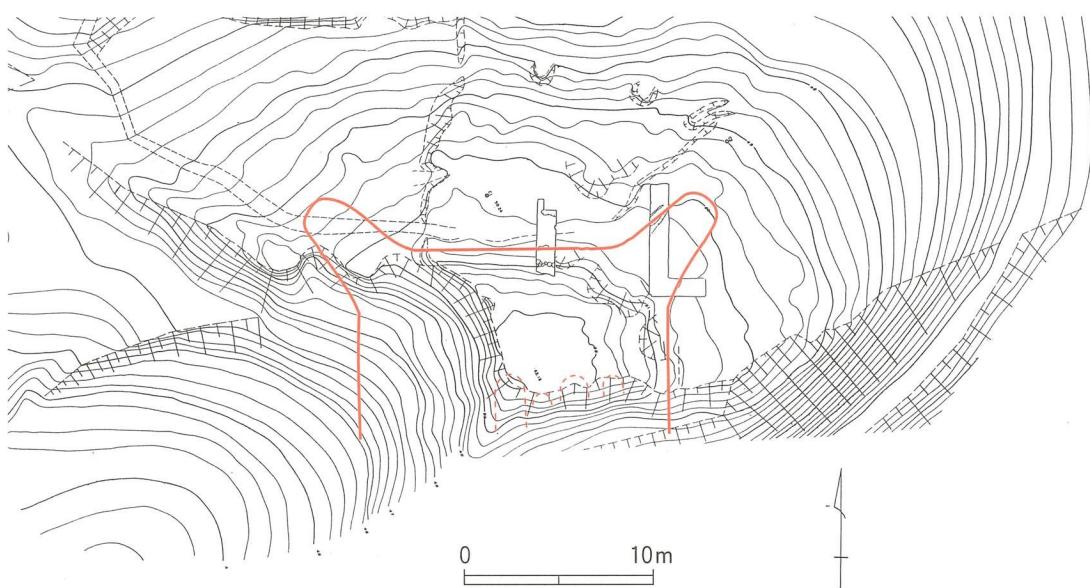
第35図 西谷 2号墓墳丘復元図



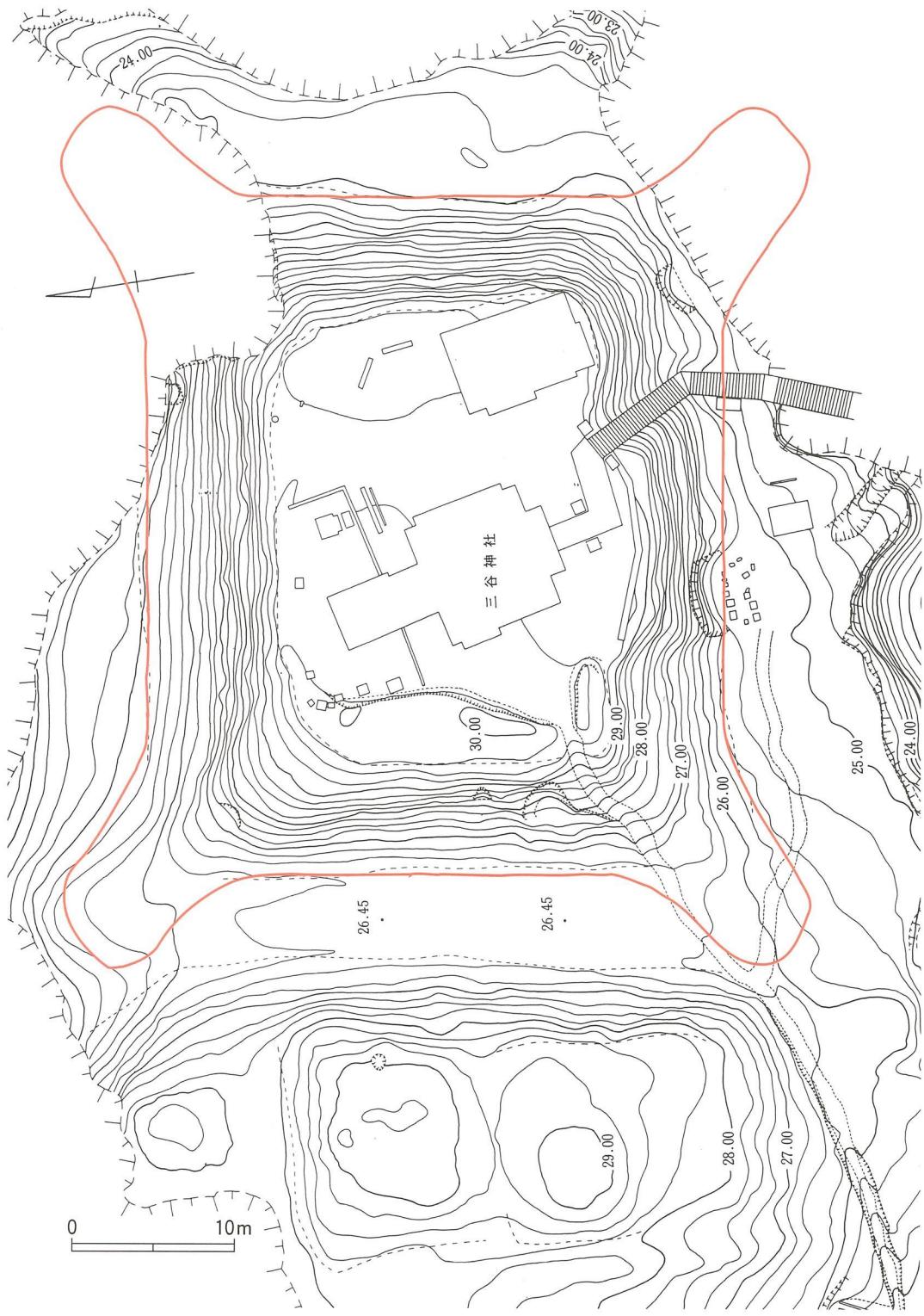
第36図 西谷3号墓墳丘復元図（文献3・7より作図）



第37図 西谷4号墓墳丘復元図

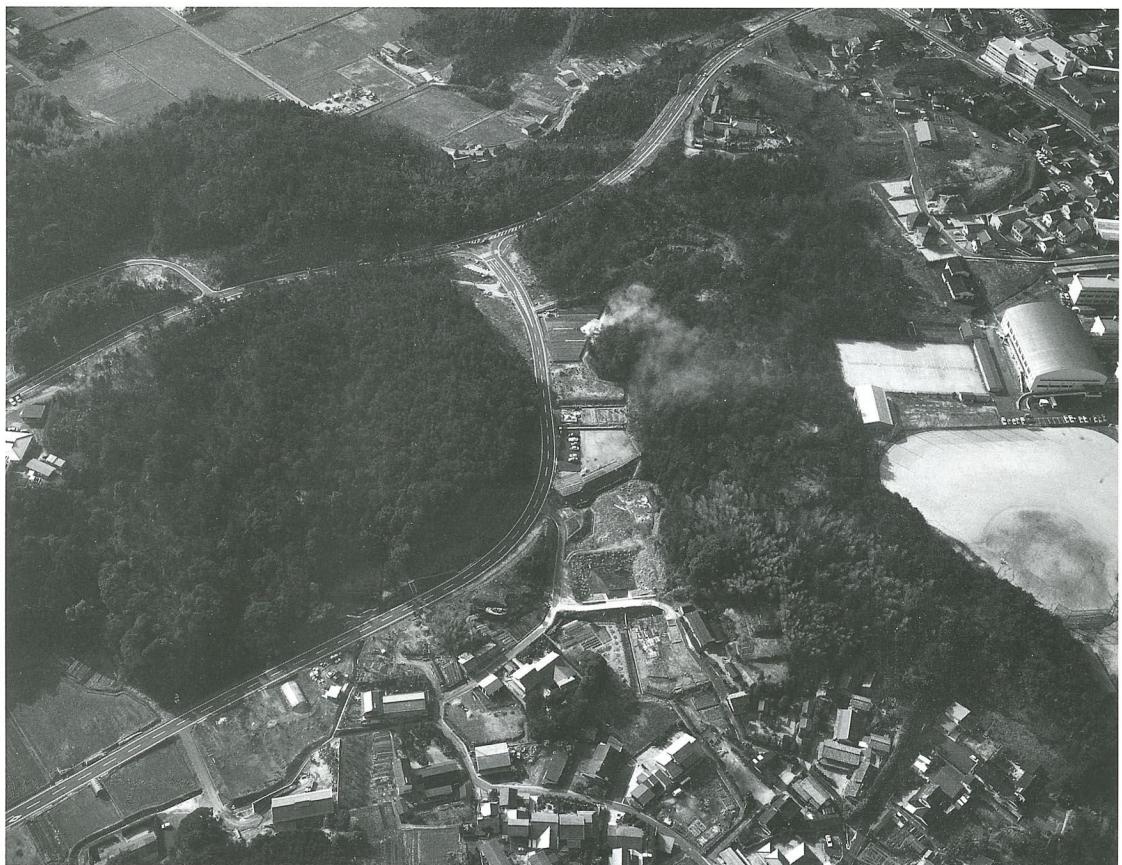


第38図 西谷6号墓墳丘復元図

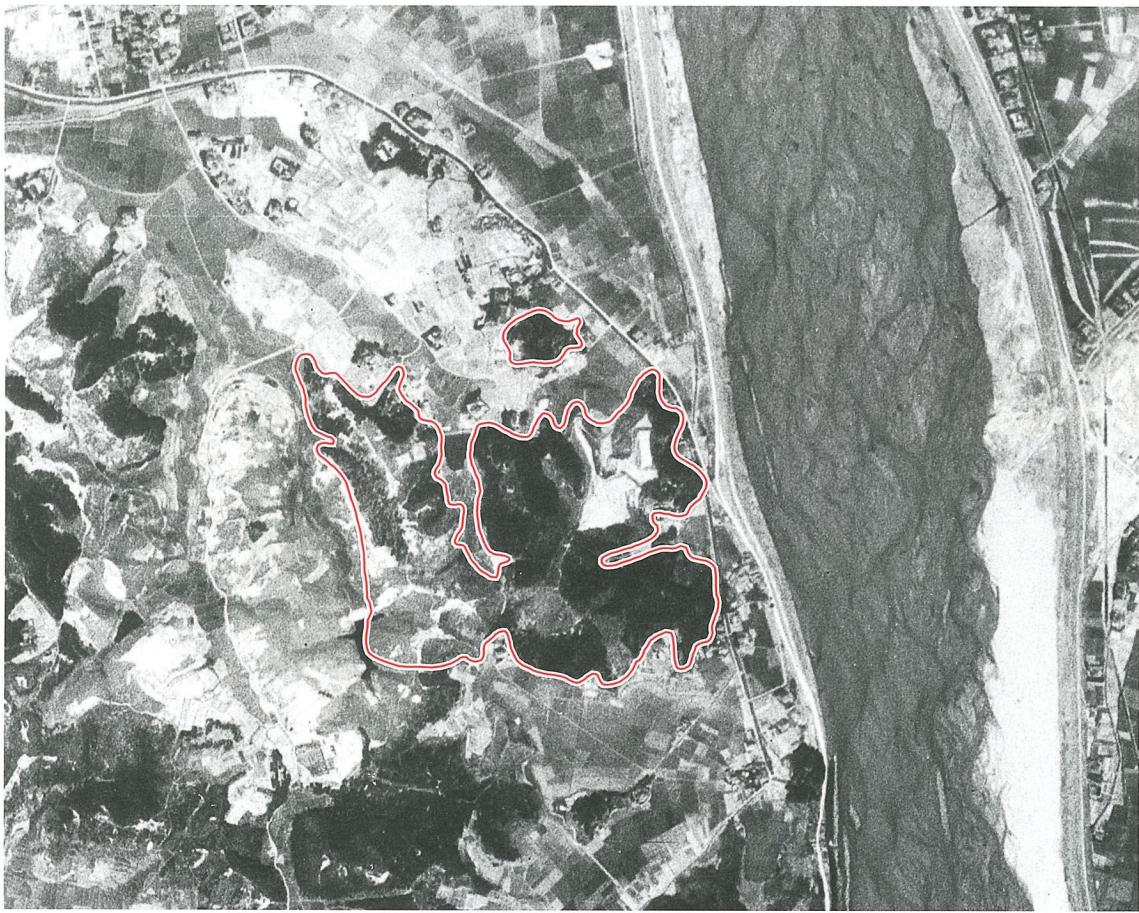


第39図 西谷9号墳墳丘復元図（文献3より作図）

図版 1



西谷墳墓群空中撮影写真（北より）



西谷墳墓群旧地形空中撮影写真（上が北・国土地理院提供）

図版 2



西谷 2 号墓 S トレンチ
(南東より)



西谷 2 号墓石列
(南西より・S トレンチ)



西谷 2 号墓 W-2 トレンチ
(南東より)

図版 3

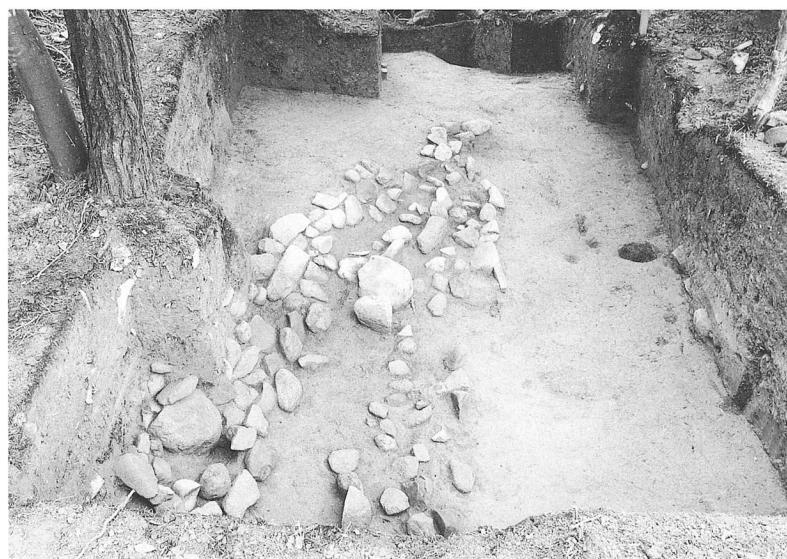
西谷 2 号墓残丘と北西裾
(北西より・手前は N トレンチ)



西谷 2 号墓西側突出部
(北西より・N トレンチ)



西谷 2 号墓西側突出部
(北東より・N トレンチ)



図版 4



西谷 4 号墓 S トレンチ
(南より)



西谷 4 号墓南裾の配石
(南より・S トレンチ)



西谷 4 号墓南裾の配石
(北上方より・S トレンチ)

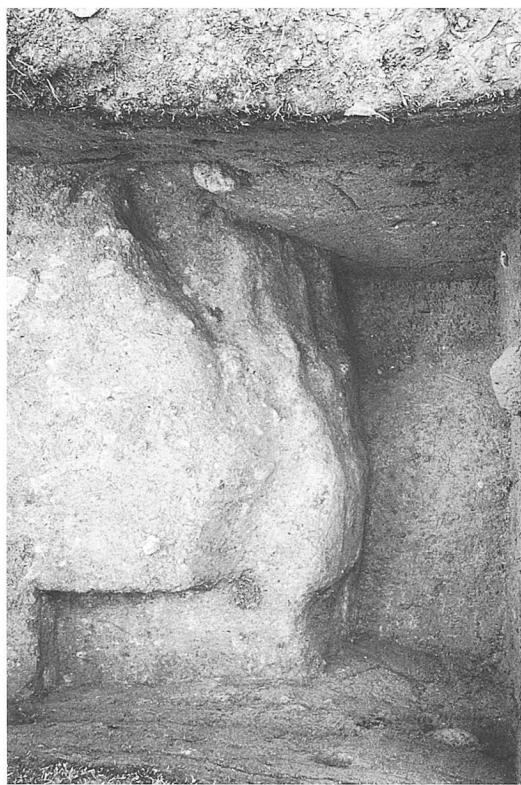
図版 5



西谷 4 号墓西裾の配石（西より・Wトレンチ）



西谷 4 号墓西裾の配石（東上方より・Wトレンチ）



西谷 4 号臺西側落ち込み（西より・Wトレンチ）



西谷 4 号臺北西突出部崩落面（北西より・Aライン）

図版 6



西谷 5 号墓N-1 トレンチ
(北西より)



西谷 5 号墓W-1 トレンチ
(南西より)



西谷 5 号墓墳丘盛土土層
(北西より・W-1 トレンチ)

図版 7

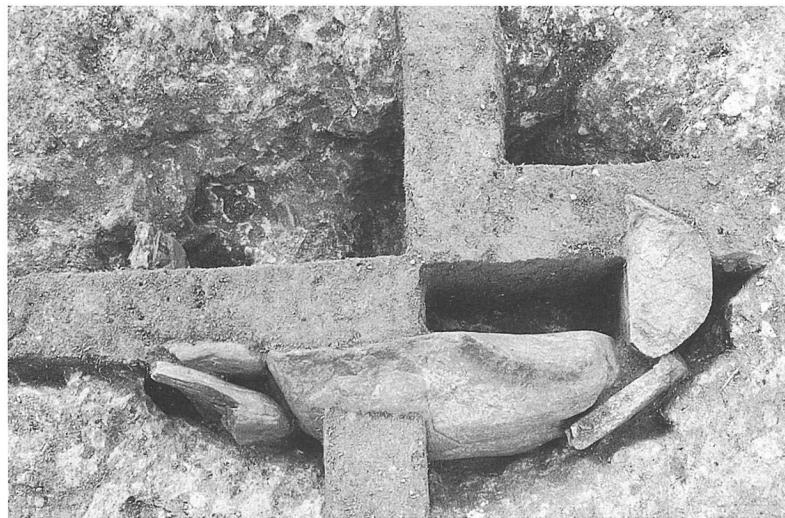
西谷番外 3 号墓検出状況
(北東より)



西谷番外 3 号墓完掘状況
(北東より)



西谷番外 3 号墓完掘状況
(南東より)



図版 8



西谷 6 号墓トレンチ
(北より) N-2



西谷 6 号墓北裾石列痕
(南上方より・N-1 トレンチ)



西谷 6 号墓北東側突出部痕
(北より・N-2 トレンチ)

西谷 7 号墓第 1 主体検出状況
(東上方より・C トレンチ)



西谷 7 号墓第 1 主体上土器出土状況
(東上方より・C トレンチ)



西谷 7 号墓西裾
(西より・W トレンチ)



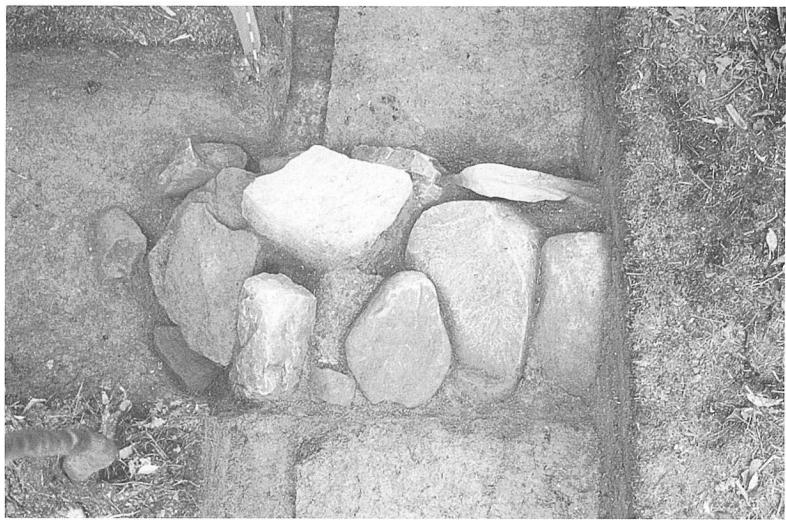
図版 10



西谷 7号墓南裾
(南より・S-1トレンチ)



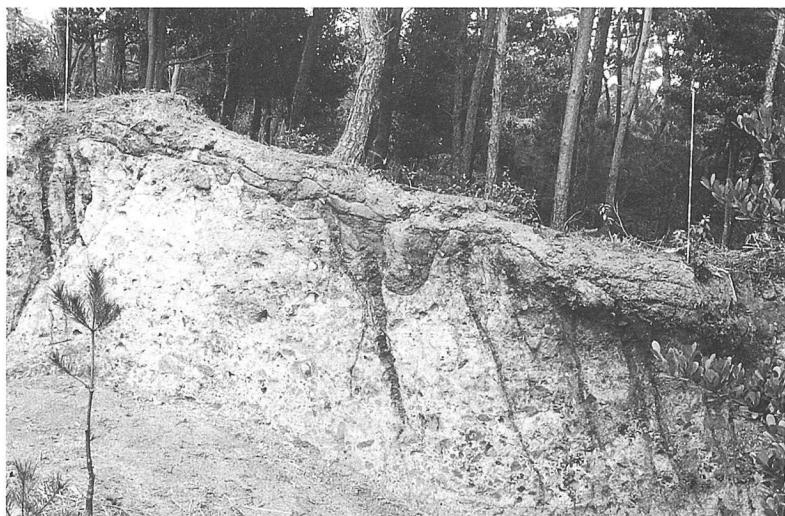
西谷 7号墓東側北落ち込み
(北より・N-2トレンチ)



西谷番外 5号墓
(南上方より・7号墓N-1トレンチ)

図版11

西谷17号墓崩落面
(南より)



西谷17号墓裾部土壤
(南より)



図版 12



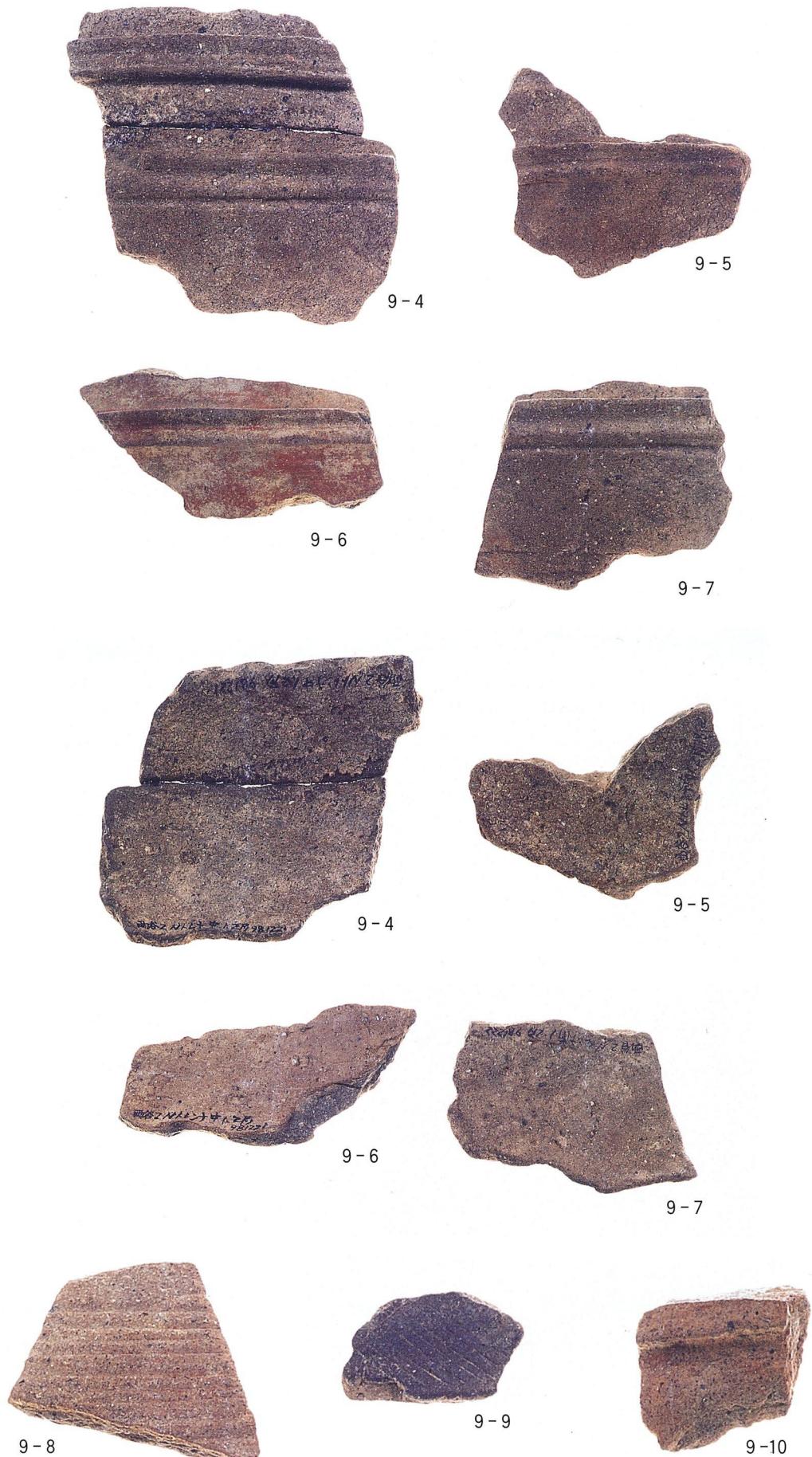
西谷 2 号墓出土遺物 - 1

図版 13



西谷 2 号墓出土遺物 - 2

図版 14



西谷 2 号墓出土遺物－3